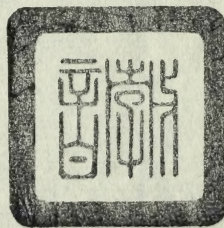
徳本行者傳　上

徳本行者傳序

龍舒居士嘗引大慈菩薩之語曰能勸二人修比自己精進勸至十餘人福徳已無量如勸百與千名為真菩薩又

能過萬數即是阿彌陁文政
戊寅十月行者即世先師故
大僧正親臨葬儀乃擧此偈
衆皆竦然謂曰聖克知聖窃
謂庶乎不差矣頃行狀傳刊

行為序證其所言非過稱矣

慶應丙寅臘八隱士蘭譽

菩薩優婆塞從五位下守伊勢守藤原朝臣政晃書

徳本行者傳例言 九條

一師文政戊寅ノ年ヲモテ遷化ス今年慶應丁卯ニ至テ既ニ五十年ヲ得タリ遺弟等法恩ヲ萬一ニ報センカ為ニ相會シテ傳記ヲ纂集ス方ニ師徳ヲ千歳ニ傳テモテ後進ノ警策ニ備ヘントス欲ス

一小石川一行院ニ師ノ一世ノ紀録六十餘巻アリスヘテ當時ニアツテ門人ノ筆紀スル所ナリ其事朴質其辭華ヲ飾ラス尤モ正史ト称スルニ足レリ但シ均シク佛事ト雖トモ師ニ在テハ勝迹ト称スルニ足ラサルモノアリ又其事勝レタレ

トモ同シサマノ事數件アリ又事奇怪ニ互リテ常人ノ疑ヲ生スヘキモノアリカクノ如キモノハ大凡コレヲ省ク竊ニ惟レハ師ノ一世ノ行履上中下ノ三等アリ今ノ傳ハ其上ト下トヲ省イテ且ラク中等ニ就テコレヲ紀録ス人ノ不信ト輕謗ヲ防カンカ為ナリ古ニ曰ク史ヲ修スルコト難シト果シテシカリ

一本傳修成ノ前後ニ在テ詳ナル事實トモ尚多ク聞ヘタレトモ草案ヲ改メンノ煩ハシキニ憚リテ暫クコレヲ省ク他日拾遺ノ編集アラン時ヲ待テ當ニコレヲ加フヘシ

一行院ノ前住本覺嘗テ其師本佛ノ命ヲ荷負シテ本傳ノ編

集ヲ企タツ畫圖モイサヽカ寫シ出セリ勞ナキニ非ス不幸ニシテ未タ一巻ニ及ハスシテ沒故スヲシムヘシ今年コレニ継テ三巻トナシ以テ其功ヲ畢フ幸ニ先哲ノ志ヲ舒フトイフヘキ歟

一　一行院ノ現住本良篤行ノ仁ナリ傳紀ノ修成ニ於ケル頗ル力ヲ竭ス加フルニ紀州ノ本乘タマタマ來リテ事實及ヒ地理ヲ説ク喈ニ製作ヲ扶クルモノナリ且ツ用途ノ容易ナラザルモヤコトナキ道俗ノ多ク力ヲ加ヘ玉ヒタルカ有リテスミヤカニ功ヲ就セリスヘテ餘光ノカヽヤク處ニシテ遺弟等ノ歡抃キワマリナキユエンナリ

一況齋楓崖岑磨ノ諸老人ハ皆幕府ノ士ナリ躬弓馬ノ際ニアリト雖トモ善クカヲ學佛ニ竭クス樂天東坡以テ相比スヘシ特ニ本傳ノ校閲ヲ請ヒ淨書ヲ託スルモノハ是レカタメナリ

一畫圖ハ門弟沙門蕉巖ヲシテコンヲ寫サシム其拙ヲトカメサルハ遺孫ノ末ニ系スルヲモテナリ二三ノ他筆アリミナ一時ノ有名ニシテ嘗テ師ノ德望ヲ仰ク人ナリ加テ以テ結緣ニ擬ス

一本傳ノ體製欽テ　勅修御傳ニ倣ハントス而シテ遽カニ似ルヿアタハサルヲ恥ツ且ツ筆ヲ起スノ始メヨリ瑜伽起信

講習ノ際ニ系スモトヨリカヲ一途ニ専ラニスルヿアタハサルノミニ非ス語澁フリ筆躓ヒテ事前後ヲ謬リ文脈胳ヲ失スルモノアリ是レ挍閲ヲ待タスシテ急テ上木調巻スルヲモテナリ追日歸正ノ本ヲモテコレヲ正スヘシ

一予幼時シハシハ法會ニ咫尺スルコトヲエタリ威貌堂々士庶敬服ス音聲枯渇スレトモ響林谷ニ徹ス婆心丁重ニシテ聴ク人感泣スルニ至ル今ニシテコレヲオモフニ決シテ直也ノ人ニ非ス顧視スレハ已ニ半百年恍トシテ夢境ニ属スコノコロ傳文ヲ紀スルニ及テ再ヒ會座ヲ瞻ルカ如シヒソカニ按スルニ聖賢ノ世ニ處スル經權岐ヲワカチ常變跡ヲ

殊ニス高僧傳ニ科目ヲ別立スルユエンナリ師ノ如キハマ
サニコレヲ感進篇ニ收メシモノ或ハチカヽルヘシ蓋シ如
是ノ因アッテ如是ノ果ヲ感ス内ニ充チテ外ニ溢フルヽモ
ノト謂ツヘシ是特ニ其人ニ在テ存ス斷然トシテ他人ノ企
望スルコトアタハサル所ナリ今ノ世一椀ノ煖飯一領ノ温
袍ヲ得マク欲シテミタリニ奇ヲ衒ヒ妙ヲ賣リ以テ其術ヲ
神ニセンコトヲ競フ輩アリ果シテ西施ノ顰ヲ傚フモノカ
只似サルノミニ非スマスマス亦其醜ヲ加フ昔シハ佛世尊
弟子ノタメニ神通ヲ現スルコトヲ呵シマタ異ヲ顯シ衆ヲ
惑ハスコトヲ誡メ玉ヘリ本傳ヲ讀マンモノスヘカラク先

ツコレヲ知ルヘシ

慶應丁卯三月

遺弟无量山清淨心院沙門行誡敬識

徳本行者傳

師諱ハ徳本。名蓮社號誉称阿弥陀佛と称す。紀州日高郡志賀の荘久志村田伏氏の家ニ産る。其先桓武天皇ニ出て。畠山庄司重忠の裔なり。寛正文明の頃政長管領の職をつとめける。明応二年の夜。河内國正覚寺の城まて。遂に戦死す。二男子阿り。足を尚

順といひ。男を久信といふ。久信紀州にのがれて。山林に竄跡し。家名を隠して田伏といふ。久信より七代の孫を三右衛門といふ。すなはち嗣の先考なり。先然は塩崎氏の女なり。男子なき事を歎きて。竊に夫婦三寳に祈請す。先然或夜蓮華を呑むと夢みることありて。寳暦八年戊寅の六月廿二日。年の正中に跡を託せり。時に異

狂歌集は風て蓮葉の初て耳ひすま言る形
らば。ん鉛の人々。其言代が出しを秀す。
筆花と云ふ難とつ。照ま留重醍あり。雙胖
かぐやゝ多年。晴夜の星のぬらし
宝暦九年の秋。八月十五日の夕。姉が挖な
影の所。池も頂の玲瓏たるをつらね給ひ。始て
両世阿弥號名とぞ称しける。いまぶ形
稱ます行りて。何のまゝすまつるなるべきすら。誰ま

なりし始めのまゝのとて。暈彩をとゞけるものゝ始の
りけるとぞ。むかし聖徳皇太子。いまだ幼稚より
ましける時。南無仏と称へましまし法語をよみ。
給ひしあかしを手にして。いと尊くぞ覚ゆる
四条の林。小鳥の声の聖。郷に在りしめしを
つくく鳥の声。いづこよりぞ又何事にか
りやう。始学の道ともに。院に詣でる者
のいふぞうまくあれもあるべきと。ふゝれ

いつくしき作はしりて自なるさまなれ。夫常
に睦しく夫婦なるべき好しと聞。何を
以てのまゝんとく海浩ふかく世嗟
てをくおもそ死といふもの、貴賤男女。賢
愚老少の[illegible]なく のがるゝ事なし。且死
たるもの帰り来べき理あらんや。此をみなす
を歎くばかりや[illegible]仏をとなへて念仏
となへまうしとぞ聴聞せし輩。[illegible]列ハ

の職業(しよえい)を卓出(たくしゆつ)して学(がう)て縦横(たてよこ)輪車(くるま)乃
戯(たはふれ)を好(この)ましく。のうそめの遊(あそび)も。仏事(ぶつじ)をして
たる癖(くせ)ありて。浮(うき)を頃(うたじ)まつけてゝ仏の
法説(くらう)ぬ擬(ぎ)し。指(ゆび)を屈(かゞめ)て印(いん)契(げい)を学(まな)びし。
禅(ぐん)児(じ)を使令(れい)するなど。松(じゆ)下(げ)石(せき)に坐(ざ)りて。
是(これ)ハ仏(ほとけ)也(あり)など申(まを)し遁(のが)されば。この児(ちご)ハ此の
まる前世(しゆく)善(ぜん)ある人なりん。善(ぜん)果(けん)古(こ)徳(とく)の詩(あら)ま
仙(みちう)として。つひるその盛(ぶん)嘆(たん)をおけるなりけり

黙堂の草子を作りしより後ハ。世の無常をふと
おもひ給ひ。後世菩提を願ふことありけり。念仏を
つれづれにハせず。九葉の書にも出離をもとめ
ねがひし。父母ましく申されども。嫡子のなからう
へず。性質にたがはざれバまゝや。猶も評
さるべき智識もなし。もとより至孝の志ふかの
かりそめ遁バ。その後ハ何ごとのうちに住給ひけれ
なりけり。時のいたるを待けるなるべし

捨るを常とせり。一畝たばこの圃におひて
しげく虫まじりたり。師ひとすぢに念仏
唱へつゝ畑の畔をめぐりけるに。この虫どもハ
しらず跡もなく成ぬる。念仏の功徳すそ。
虫の生を転ぜしならんとぞ申伝ふる
人となるに随ひて。其志操無垢堅固にし
て。念仏の修行ますます勉励をしける。
十六歳の夏。四月二十二日。散髪して抽きく。

晨昏二時の勤行式を定らる。各専ら写
経を一時も廃し勤念佛をしれしき。暁の
つとめ勤して。東方なほ明ざれば。自ら鐘を
撞て。巡礼堂舎などに携られりさへ
を。昼のつとめ終て。夜のつとめいとはずなり
きたれり。時として睡魔の妨やあるまじん
とて。足ころりつゞりし悪業を禁じ給
へり。稀有者の難もありまひあらはれて。

いと繁榮なる所と聞けり
此村の習ひハ。佳節を祝し。神を祭るに
なべてハ老少長男女。家より集ひ。酒宴圍
甚だ愉快なる事なり。此ハ漂浪の山に
洞の中にありて。木像を刻み。尊佛禮拜
きれいな所
此の郡を距る事。東の方面を望して。
大渓河の岡なといへる幽邃のところあり。

住持の僧を大良といへり。専修念仏の行
者なり。阿弥陀をたのみまゐらせて。別時念
仏をすゝむること。月に或ハ七日なり。住持
は阿弥陀経をよみたまひし。同じく勇進
して勤修せり。阿家にては。毎朝の形
らば湯水にて垢離としけり。こゝまでにか
こゝのめぐ垢離をとりし人迄ば。垢離石とて。今
なを其のはしに存在せり

一とせ雪いたく降る日。母堂のいひたる寒くおは
しまさん事とて。いろ〳〵に薪さしくべて。火を焚給ひ
けるに。翁鬚いと白き元藤門の戸さしのぞ
きたり。回國行者やと思ひしに。さるハいと寒
ゐるを。鬚このびやかなりけり。やまをこえいまぞきぬれど。
この洛陽へ入ませとばかりのんで。扨いへ
あるハ。其の相好只人ならず。後日。其の為
人のあり。いみじき知識とこそハ崇めぬ。

これ繭（まゆ）すなり。よく煉（ねり）てのべいだしたる。又一
枚（ひら）より出して。厚（あつ）さ一寸ばかりにうけ載（のせ）て。煉（ねり）なる
しまた。この花紙いづれもいづれん。ここにも出たり。
縁（えり）積（つもり）する雪（ゆき）の深（ふか）さ。河やぬへきよし。先かくてや
こぬ。これなん綺（れい）の一枚（いちまい）切（き）紙文（しやうもん）なりける。隨こ
速を得（え）てこれて得ハ。清淨（じやう）樂（らく）の明證（めいしやう）にして得よ
過（すぎ）ずして。この蓄く襟（えり）すのそれある。南隆（なんりゆう）公（こう）の
父母（ふぼ）帖（でふ）とゝもなれ。常（つね）にて護持（ごぢ）されなり。河生（しやう）

此の法語は文の外を離ざるもの也。のがるい
よく熟行せバなるべし
出て親族を恭敬しての後ハ。学を勝
晦日の所なりて。家業を勤べし。さすれバ
三十日ハ平日より安かるべし一家の繁昌すべ
生用をもてなして。時ハ法語を狼狽する事
ものなるべし況陰陽の三十日ハ殊に柱をも。当家
其用をして。往事の瑞程を銘記べしとぞ申

されば或は
或時。烏族の此を誹謗するを聞てその者いく。案じ
何ぞ禽獣かなることをしらずして形をや。人ゆゑに
此ば人まづ我をそしる。筆跡の乱れを臆するが
ぬ。人を誹る事ハ大誤也とて。自ら戒め侍り
徳を積ことハ。人目にしらぬことこそ誠の徳をつむ
なれ。是を陰徳といふ。人の為なる事なれば。
人しらずとも行ふべし。さればこそ草木の種を

悪は。人間またはずとなる。まはずすれば生出る
もの也。善根をみつのめしとぞ申されける
人まそしらるゝは。前生のよき知識と縁あるべし。
めぐみの行き屆くはぐうのうはし迷めの
なり。前生のあしき業にて阿漢に逢へばかならずて
善人となる歎とぞ申されけるゆへ親族
などが縁者の宅住まで。清白のふえんなる事
などいふをも聞へば。忽ち心を励まして。

何とて宛なしぬ事をとぞ乃に詞を出しつるぞ。
かゝるあやまちし。その一言より起るものや
とぞ呵をし述ける
出羽国の某の話。此の父病悩の事あり
けり。此辺の醫薬を尽しても覚らるゝその逕邊
すべき山路を経て十里余五十丁なるを往
朝出て。夕ぐれの帰りに必ず喘れらず病をたすけし
きこえ。薬をもとむる事。一月に十餘度なり

後ハ。絶て人に託しぬるハなかりきとぞ。
その志操世にひろまりし。さて此の父ハその年
の三月二十五日に。正念に命終せしける。よハひ
六十七とぞ
此。野にいでゝ農事をつとむる時ハ。鋤をすてゝ
念珠に代。山に登りて薪をこるにハ。念仏を
もつて樵歌となし。総て人のつみをまもの
らず。或時ハ草根木実を食料に宛ておし

るすなり。それは苦行の温飫を識んが為也とぞ。
月毎に小池村の大日堂。蓮寔の三経を書写り
詣て。また出俗の願を果んことを祈り
天明二年の春。然郷村浄土の住持。大圓
に徳に随て。五戒をさん受れたる
同三年夜のころ。食後。雨のごとく持仏堂の
扉押ひらき。本尊阿弥陀仏の光明
一丈ばかりに現じ仏の御身にあらはれよしと云

摩頂し給へり。母堂も傍に侍りて。おぼろなり
このゆめさめけりとぞ
同し頃。御むすめの懐中に蓮華一茎おひい
づるとみる。十四日を経て。又相並ぶ小蓮華
一朶を生ず。河と母堂のこゝろをあはせて以
ども懐妊のまふつゝありしき。河いよく策励な
御し給ひける。蓮華中にて生長し。四十日
をのりを経て。或夜。更闌人しづまりて。河

仏前に念仏しばらくありて。たちまち壁中の
蓮華十方にあらはれ。金色の光明燦爛として。
牆壁を照し。無量の聖衆を照す。無量寿を拝みて
仏間を伺ふに。阿光明の中に端坐念仏
ましますさま神妙いはん方なかりけるとぞ
阿穴ひ。心地漸然として。ある大桶の底の打
抜しめたり。これなん一家の透脱などいふ
べきや。然ば。家内悉く光明ありて。心中に

あまつの佛ましますところを高天原といふ本なり。これ
又一切の念佛三昧を發得せられける心
成就。萬法を藏り。此を登りてみれば。根
本の座なり。行力圓滿至へるところ。又地藏
菩薩のぎやうなく圓滿終りとぞつたふる
ものなし。鷲までわたる霧に日輪の雲に
頂くをそる。笠を眼をひらけば。光明の中に大
日如來現じ給へり。こゝ大日と日輪とは一事なり

不二なる事を了知し給へりとぞ。毘盧舎那をば。
光明遍照と譯する露軌に擬て。いとたふとき
真言秘訣し。又或夜の夢に。法長三尺ぞの
の石地蔵苑。變じて六大[illegible]の金色の阿弥陀
ぬ事と現じて告ての玉はく。吾本地は阿弥陀
なり。南無の南字は。四十八願こもれりとの玉へり
とぞ。抑天台大師は。阿弥陀の三字に。空假中
の三諦を配當せられたるよりて教へば。南に

四十八願と告させ給ひたる由ある事なるべし。又
於いて菩薩の本地阿弥陀と給へるなり。此菩薩
は諸仏の因業を継給へるなり。法蔵菩薩
因位の姿を。古人のいへりしものなることかりと
思へる形なるべし
三尊の四字の奥。無量寿に對して。光明の望を事
たし光運たり。無量寿の影にて眼の振舞。それなしぬ
のこらず形くの好相などのさまをまされる

なほ。今ハしひて塵俗の中に留めんハ冥慮の程もおそれありとて。剃て尼室ましまされき。阿ハ日頃神明佛陀に祈請せられしハ。唯この一事なりしを。漸にして。母堂の許されをうけての。うれしくのうちなくて。あいまみしつるよりハ。袈裟を被着して。形を現常に同し。佛地を希求して。心を運ぶのぬきんとぞ抽けり。即六月二十七日。多宇村浄土寺大圓上人

は割て。六度の式をうけられたり。されバ気
勤行す。菩薩發願して。生々世々。このむくずしや
いつの身をうけんと誓ひ給ひ。善導大師ハ念仏
絶離囂塵。從德由可以積との給ひしまゝの外
ひとつのとしごろ出家をこひ願ひ給へる。
宅にて宿世の本願なるべくとや
天明五年の春。大隅川月心の住職。大良
ねんごろに三十の日夜を期して祈念

佛の御業をつとめらる。其外に小丘あり。
丸山といふ。縦横二丁許りにて細路あり。是
おさめき道場なりとて。昼ハ読経。木履にて
常行を修し。夜ハ堂内にて称名をとなふる。
らる。炒麦一合を以て。一日の食料にあて
られき。第四日を経て。太衆和尚ハ堪ずして。退
出せり。跡ハ一僧も懈怠事なく。三七日を満ぜ
らる。羸相にて見る顔しかれど。随念すなはちく

盛(さかん)なり。或老(らう)人に語(かた)られけるは。何事も一道を貫通(くわんつう)せんとおもはんものハ。精勤苦(く)行(ぎやう)を経(へ)て。錬磨(れんま)を重(かさ)ねざれバ。とゞかぬ事なり。至るものなれバ。はじめハむつかしきものと おもへども漸(やうや)くにしておのづから平易(へいい)の場(ば)にいたるもの也とぞ申されける

同年九月。大河浦の円光大師(ゑんくわうだいし)へ参籠(さんろう)の事あり。これより塵境(ぢんきやう)を屏絶(へいぜつ)して。跡(あと)を林丘(りんきう)に

憂し。苦行の功能にて利益を四方に及ぼさん
とぞ祈求せられける。後日。多津川酒ヶ谷など
の苦修練行ハ。こゝに発心せられけるとぞ。或夜
の夢に。十一面観世音菩薩。告ての玉ハく。汝
穢所にすむべし。穢所にて修行せば。利摂
ならんと。其のち。里人はさる菩薩の霊跡
やあまたの所なりしの穢し附つゞく里人ハ
崇め内させく。そこて好く押宗しる落合と

いふなよりつたへ申されけるハ。菩薩をつくりたまひしハ。ま
ぢしく[illegible]なり。いかにこのゆへぞ。念仏修行をバ
やうの好かりぞ。里人払て茅をかり荊をきり。
膝をいるゝばかりの草廬一宇をむすびてやすミす。
その地に白山権現の社あり。時によりまうでゝ
ハ。神に心をつくして法楽をさゝげ。外護をなん乞
申されける。後日或人。その社の本地仏とて。[illegible]
だしゝを授給ふ。夢中につげありし。十一面の

学徳にすぐれさせおはしましける。されば都鄙の
まことより緇素きんそんして菩薩のごとく
おもひて。指揮に従ひ奉りものを。遵法せしめ
ぞり
落合谷に葬られしは。元禄六年二月十七日なり。その
後農夫林助といへるものゝ妻。源左衛門といへる者
の母。ひさしく墓にまうでしに紫雲の中にあまたの菩
薩。光明赫灼として。手に瓔珞をとり給へるが

西方より来り。この草庵に入給ふとみえける覚て好
このみに語りあへり。如しに夢に違はざる事ばかりよく
師を仰のめぐみぞ尊み給ひける
木津川の草庵に移り住給ふは。縁の衣に麻の
七条の袈裟一肩をまとひ。念ひもすがら命をさゝ
さゝげるばかりなり。夜には丑の時より起出て瑠璃に
臨で黒く懺悔を誦ずし垢離をとる。虫の
罪障を懺悔し給へるなりとぞ。礼拝の数おほそ

五つ七つ。遊ハ一芸に偏る事なかりしかバ。のち稽
古の式をさめてハ五體投地とぞあらひられける
陸の苦行かまりに精勵をこらしされける中にも
や。恩情うれてこゝ言語をなす事能ず。喉のうち
にて猿じて。舌て声を発せバ。口にて歯すで
き。眼耳鼻より手足の指先にいたるまで。悉痛
徹すること。言語のへつのうし。とりしゝ雑念の
こゝろまで。毎度の垢離にハ。寒風肌を刺り。満身

のひゞ輝あらん松虫の如し。樒摘むがごと
り。鮮血ほとばしるまで也。されど道心いかに
うつ堆弥く。つよく勉励をつゝみきとぞ。嘗て
人の口の外に遠く全く仏道修行は一旦の観念を
しのべがたき事也。これ余のほかにいはゞかゝる
観行の場にいりては。一方痛悩する身のみ
いまよりのちも。法華三昧比丘の縦令身止苦毒
中我も行ぜん精進勇猛不悔と誓ひぬべきにまして

念ずれば。釈迦の力ハ煩悩を割除すべき
よし。仏の誡なるを。師のこゝろ得ざる
は。無益。長爪梵士の修学よりも甚しくして。
手足の爪をきるべきいとまなきといへる類
なり。読経の人の学ぶべき事にはあらじ。
よく経論に達するものハ。自のづからしるべき
邪学
或時無言をして別行をしれなる形あり。暴

淫するのみならじ。そのさま古諺のいふなる
まゝ。或ハ赤く。あるひハ黄ならず。その下より。
十二三日を過して平癒せり。自然して。又胎の
毒疫。この時黒脱しされるなるべし。これは
一しほ力のうすきを覚えてりとはる
浮れさりけり
又或時やしなへる口称の南無阿弥陀佛
をとめて。本尊とするなれバ。いつまも泥木絹素の像

よく望なしとて

本願のこのいましめをわすれ給ひしハ勿論なれ

まづさかりつ何す給。とぞくちずさみ給

へりける

その後またしきりに苦行をこらしけれど。

両の股膝ただれ。悪汁流れ出て涌がごとく

して。その痛堪がたし。薬を用ひれどもしるし

なし。皮膜裂破れ。あるひハ薬研の口のご

とし。されど例時の勤行ハおさ〳〵おこたらず。
嘆誦礼拝をしられ。五躰投地ハつねなはざり
しらバ。小こゝろ他力を擁あり受て拝しあすひハ
ちかづし霊聖を佛をしれり。そのころ
のはずかしとぞ
世をのがれうきよの中ハ擁けのいづこ
旅の思ひ也。なつのくなやし旅あるまゝれ
五十日ばかり婦り。皆附らづらし呼しての

絶く。かゝる病悩にあふものハ。みな宿世の業報なり。自悟りて。いつゝしみ受。謂をとの恨
これをとがめん。前宿因をつくして。今
はまじめ冥々障碍をさりしにより。かゝる因
苦を受けり。しかれども悩にて勤ずんバ。未来
の苦患。今より百倍すべしとて。いづれの誡
自勵して。いよいよ苦脩をされたり
或時。圓山の学侶訪ひ来りて。数十日の間。

時の流浮にしたがひて。とまれ合併なり。さて人〳〵。時をかぎりたるハ。昔。了端誓。朝禅の為たる徳ハ本食斎なりとえ。久しく三昧経修行しけしなり。然るに。時が其の行業と甚だ相似たりとぞ申すなる。時これを聞て。感じ入りて。其志有りとて。それより八万劫を経ち。延喜年あるものを当ずして無精進もしれざり。精豆粉一合ほどそ一日の食料と定めける。時の

迦鹿檀苑の苦行ハ。山居巌棲の間、事の煩しきを略し方便なるのミ。此の人これを学んで言をあらし。魚を盛ハまゐり。此の罪人となりて千津川の小屋におはしける時。椅子の下に鼠の巣を作りて子をはぐくミ居りけるあり。ミある時。椅子の傍より蛇出す。平生蚊虻の類。蠢を噛み殺し。殆て厭ひまつひ

好みなりし故。怒愛の広くものも及べる。
古より恥ざるべきをや
千津川の若乃水。いひ得ざりなるべし。今は
行脚をばすやと思ひしかば。寛政二年十
月の頃。その比をも出て。同郡。萩原村を通る
り。邑中の男め。法の律すゞりて。何れ
これ片を好て。我が語世助も好へ
など。懇まこしも申して述ばさんづて。当村の

谷のおくに。かくばかりの首尾を結ばれしなり。
坊中の男女。昼ハ農業をいとなみ夜ハ
秉燭ごとくなり。先祖の遺をつゞひすきて念佛
す。へ編忘て居る。そのめぐり二里ばかりの間
を。毎夜勤行念佛をする。されば。行脚のこ
ころざしを果さんとなすで丸山といへる所ハ。
むかし湯河直春の居城なりし城趾なりしと
景勝を攀てねんごろに回向をしたりき。

この城下の何某。名をばすゑ白極ハ。しば〳〵
陣中のめしつかへにて。師の恩顧をわすれて
のちハこゝろやすくありしぞ。あひせ遊縁の徒
贓してぞ有なんど。人の申伝へうき
ことぞ当町の何某。疫病流行しければ。
師。申きて。里人に仏神をいのらずすゝめらる。このうら
功徳すみやかなりけん。邪疫退散して。病者悉く
平癒す。村長等安議して。師の許でつゝに

修行し給ひしまゝ。その人は向後のことに廟
薨去ありし後いのりのためあまた名號塔をしるして。
この村の四隅に建ずやとて。人ゝ心をなりき。
塔を造るべき石を。早葛村に搜し求めしに。
こゝ河の邊にあやしき石ひとつありけり。
されども人の聞あるを恐れば。これを措て擇
すぐれて美麗なる四箇の石を択て。千津川へお
埋ぬ。藤井の里に石工何がしといへるもの有。

法ほまのゝきそゝ。形のくりし六字の中。阿字の
つくり此。可字の畫より下を書續きを施して。
こゝで形をそゝ。落台がまで建て進る。今も
書續の塔といひ傳る是なり。然に夜風雨
じゝうりしげよ何字の形ゝの書續の名
稱揚。つゞきの形くつんくるなりそ。人挙
尋求るに。おの形し字の中に。路の作標
尾のみそかの。戸ざしいまものまゝまそゝの戸

その内に入りて。偽善としてそりて。いかなれ
バてびなしず二てびじやぞ。うる不思議をつくする
るまよそ。阿まりしのよしきこえて逆バ凡夫
の極楽に往生するハ。その身のづから飛すあり。
不思議ありとぞの給ひける
阿羅におしへて。戒ハ仏法の寿命。三学の
基本なり。いやしくも。法のしやうもんの語一日も
戒法なきの事を沙んや。況菩薩の戒法ハ。天

龍八部に及ばんや。吾人ハ力をもてり。豈(?)雨(?)衣(?)
に遜せんや。豈きく。善導大師ハ戒法
を護持して纖毫も犯さゞりき。今時ハ
たゞ師によりて。乞戒の方便を祈らんとて。
七日の別行を定め(?)一百(?)をへる。ほ(?)際に日輪大
窓(?)に偏満せるをとみんまつ(?)天華乱墜せる
を見給ふ。結願の朝。何ものか来て(?)
経机の上に。梵網経一巻あり。師始てみ

經をつんどくして。訓義いたさずなし。はなはだ

まれなるをとうてすきかごとしくてありし

やうやう力を勤操してよろこびの色。面て

顕れけり。俗は。南都北京寺院の叡辨

和上浄楽寺東西営るの義雲和上まごころよろしと

うつて経しよそあつてこの身をて好相すてあ

しく修戒しけるし也とて請服をうれき

寛政元年十二月の比盛なりけるしあしげ

しかるに吹抜いて部庵のうちにさん
しらべて何ぬ日ころもしは来る人もなくていと
静なり。いざつとめ料とて例の嘆讃念の
さゝまそて。念仏し給ふ。偏身汗流れて。
濁座に滴るぞのり也。善導大師の雲夜
まで汗を流し給ひし影うらやましき昔のことなれハ
何ざりけり。この浪ハいつも宣奥の事を修し
て。欣求ハなかりけるを。古好の余庵ハ三文のこゝろ

より。庵の中。光かゝり。荒照の如なりけり。阿の姉と本名尼とは。やゝより詣すまて。斎日ごとの精進を怠見せしとぞ
国分寺の夜より持ゆくまで。雨霧深ざりし逢ば。国内の寺社に仰ごと有て。請雨の祈禱を修せしめ給へり。阿は其ころ。
塩津の黒山の庵にいましたる尼公人詣すて。請雨の祈願を行ひけるを。

乞食なれば。師答て曰。我世を遁れて達悟
世望撫を修す。風雨以度の利益はおの
づから中にあり。いまおまへ修する事を
眼るに及ばじと示されければ。諸縁の難
ありし妙(?)がよし。ひて申されば。さうづと
ある。耳の粉を。食料に備しめ。我今より
諸(?)の修行てんまづふ。蟄てこの座を
たゞしとて。一暁より筆(?)ぢやうを埋(?)て念仏を

湿る。かくて石の中の妙ぞありけり。
響は雷なり。雨ふり霰して。雨おびただしく降
今ましけれども。此時ぞのりましてて一天を
の曇りかかりぬ。師のいへるは。さびしの旱
魃は。全く龍王其業の為所なり。三顆の
冥龍もいかでか修せんとて。雨乞はとどめられ
けり。さて是数日の間。雨露ざりけるほどに。
池の主の龍。雨ふらざることを歎じあへりき

同年十月のはじめより。百日を期して別時念仏をはじむ。庵室の戸を釘うちて閉。言語を絶し。睡眠を廃し。口称一行。勇猛精進也。食物は豆の粉一合を一日の料とせらる。翌年の正月。別行満足してつぎて七ヶ日水食を絶し。別行を修せらる。霊瑞あり念仏勇鋭なる事。前時の別行に倍せり。同六年五月のころ。祖師の廟を拝せんために、

左京をしる。清浄華院の勧首大和尚しる人なりしを遊ぶ。これを訪逢しるに。勧首よろこび。河を山内の松林院に請じて。留錫をしめらる。河らの躰。華頂山に登る。抑吉水の禅房大谷の道場ハ。□宗の勝地。源空の旧跡なり。昔ハこの所乃清浄の庵なりしを。今ハ大厦高堂玉をこゞの飾。いへらかなしへかり。都てこれ利物

編続の御よしそれしかるが天応寛文

の勝地なり。是を近ば。雲霞さしとゞめ難く。

懇ろに浄土開恩の指図をぞこうむる。この

序よろしくば。京洛の祖跡霊場ハ。おほ

よそ拝礼せられよかり

或日。比叡山巡拝の序。大原を経て。古知谷

にいたるをりから。湛然といへる人の草庵に来て。人多

参籠せられ。十宗を授くる。師ばらくとまでハ。記

髪肩にたれ。錫杖を突ならしありきて。陣
誓文の再来するなど人々は申合り
同年の九月のころ。熊野へ詣んとて。渡津を
出立けるに。頭陀の僧俗りつかにある人なりける
弥勒まで。一人の童子さりける。爾来の如まて
いさゝか形ぞなるに。何となく威儀を備たる
まかりて。人々の念仏申つゝ行をみて。講
の外に備ひたる気色にて見えぬ。翌日に

ちかきに。あまりの魚。水面に集りすむれば。
菰をいつしくもとに。髭の間に魚ども
野ざり形くあつまりきて。川の中へつゝあわて
こる所。決しはつくるに法祇。十念を授けるに
て。諸の中なる菰を次第にほどこし。川の
底りを泳ぐ故ふ。其の魚つき従ひとおもて
つれぐの見ほどに形り。見る人奇異の
おもひをなすはなりけり。清水長老の

識(しき)つぼまり投(とう)じまゐりけり。水中にまいりて渦(うづ)まきて沈(しづ)みけり。死骸(しがい)空しく浮(か)らびけり。廣大(くわうだい)なる鰻魚(まんぎよ)のぬすの。名號(みやうがう)をとなふるにふくみて。浮出(うろみいで)つるが。やがてそこを出てぞあいれ給ふ佛かおゝの力なるやうに龍神(りうじん)も轉(てん)じつるやとぞ申されける。須弥蔵経(しゆみざうきやう)に。龍(りう)劫(かう)に五種(ごしゆ)の不同(ふどう)ある事を説(とき)給ふ中に。婆樓那(ばろな)龍王(りうわう)のつくり出(いだ)せる所(ところ)なり。一切(いつさい)魚形(ぎよぎやう)の

陸仁なりといへども。いまの饅魚は[illegible]。
果してその家族数あるべきなるに
遠津をちゝみつりは。三頭のい傳にて神祠
あり。或時。神霊比丘形にて現れ給し。法
ま?つゞての玉にて。諸人さまざまの事いのり
けるに。いとゝ心苦し。本の法力をしりて。
戒光を信仰きんとすとの[illegible]ひき。是より
後そのまゝ神前にまいりける。十年を経て法楽

し給へり。或る夜(よ)夢想(むさう)。明日(あす)なん斎食(さいじき)供養(くやう)すべきよし告(つげ)給へり。翌(よく)るいづくの人ともなく。斎食(さいじき)をもとめしす喫(きつ)しぬ。阿のこじかくこれを受(うけ)給ひ。斎後(さいご)即(すなはち)清霊(れい)に詣(まうで)て神ならんとおもへり。うやゝしく備(そなへ)る供(ぐ)御(ご)の菜菓(さいくわ)調理(てうり)。すべてことさらに阿のおもふ。供養(くやう)ありしにたがハざりけり

同年十二月のころ。或(ある)夜半(やはん)ばかりにいざなひより

吉野山の奥にて、深山ぎやうをおこなひ、錫
杖よりて庵を立出しら。其時は。現在鷲嶺
の二師ぞ頭陀し給へり。本尊。本地男二人の
尼君続へ聞て。其あとを追ひけり。かの岩
谷の岩屋の内よりまづ出給ひ。まづ楊柳
寄れば。時修行をやとて、縁なき小社の
梢よりゝのこり給へり。尼ずも歎き
こゝろを追つゞけりけるに。いつて常をそれば。

本願ハまれなる何してしばしおどろかぬ。頼子
八萬劫の業じたるにおどろきてあるもさうん
ろん。大願の阿弥陀仏。光明赫灼として。社の
梅よりみちまよひをとりてある。本願あまりり
驚て拙すず。不檀を三劫ずつり拙きかな
うつお和まそて南無阿弥陀仏と唱てあらを
阿弥陀手ぞきの強ひを迷ばしくのくのよし
きこへ申たるに。やがて浄土ちまそつへる事あるべ

し。かれバ、このしこざるまじ人にならへりそとのなし
くす。源氏の頃のほとりに聞えけれど。枕草子のや
うたへりきよ。能は本朝一双にいへりけり。うが
ら雑書を書き雑書の堂へ入りを経ひ。こうそ
小童をとてかつゝしく蔵中の新を借りじぬ。
おしゑ堂の前を人の通るたびそれに日ごとに
の逢ひ出る人なれバ。母堂のほめとへこそつゞ
かゝる田舎。すがや村を過ぎるなり。

鬼史栄助(えいすけ)といへるもの。師(し)の傍に侍て膝(ひざ)まづき
て。けふは。かの世ぞ母の忌(き)なり。のしこけれども。
今宵ハ藪野屋(やぶのや)まで詣(まうで)ぞ請(しやう)じやうる。招(まね)く其栄(えつ)助。いの
なき両縁(しゆくえん)をも結(むす)ばん。師(し)は喜悦(きえ)渇仰(うろがう)するさま
肉身(にくしん)の外未来(みらい)を救(すく)ふるぞとてや。いので師(し)を此(この)
地(ち)よりめでたしとて。我身に地縁(ちえん)をさせ
さとを結ん事を願(ねが)ふハ思(おも)ひかけたるへとなど。
歎(なげき)ありて述(のべ)バ。そは善き志(こころざし)なりとて。所望(しよまう)するま

うそしらず。栄御よろこびいさんで頗くご天狗山の
林服(りんぶく)に所謂すべり岩でいわところさゝやかなる草庵(さうあん)一宇(いちう)ありて
て。本法仏像(ざう)を安置しあり
須賀谷(すがや)の山ハ。有田郡(ありたごほり)に属(ぞく)して。でるほさ廿町ぞ
のりぬ登(のぼ)るべし。中(ちう)ぞよりいふハ。松柏(まつうへ)も生(おひ)そず。
巌石(がんぜき)そばだちみなぞびゆるやうなりそ。峻嶮(さかしき)いふばかりの
なし。昔(むかし)畠山(はたけやま)政氏(まさうぢ)といへりし人の。籠(こもり)ける城山(しろやま)
まで。続(つゞ)きハ魔所(ましよ)なりとて。つねにハおそれて登(のぼ)る

くるなりしと。はしんぞうして。前の庵にハあれども。この蔵経こそ。宗源独照すは今道場なれ。これ庵ひとつ造り出しとなん銘じ絵ひきつくて常師のこうじて。蔵帳の中心むかひける岩屋のよる。方丈またたゝしめ平地一所をつんせ出ばられしくて。やゞの手作り切れる岩屋までひらく。丸木の柱を建。杉ぶれ檜ある薄ちゞやまて。爰きに宿ひろし。まつのたゝ膝いるゝほどなるべし。下ハ千仞の

雑餅まし。これも喉が眼も暗めくぞうかたり。庵は雨露のもるまゝにて内外の隔だてなき迄ば雲風膚を擘き。冷雪床を埋みて。さ飢がし露地坐ま勤なることもありし。其の頭陀事一と佛の讃給ひし迦葉尊者の跡をふみ。其労給へども人の中のつとめ迄。苦行にハ何ぞうまり。この宗の師ハ。須ちやの業の器量なり。日々に乞斎食をそなへらび。

薪水を供じて。雲衆一日もおこたる事な
し。後出家して。本因といふ。この地をとりて水
脚遍りて。盥嗽の水にたやすからずとぞ。然るに
日頃おもひし泉をある時。[illegible]の[illegible]ひそかに。湧
ごとより七夜のうちに。思ひしのびてこゝにすみて念仏
をとなへ。銘じ玉へり。其夜そのごとく。毎夜。竊
にのぼりて勤をる。第七夜の暁に宝らの岩の
根よりいづ。清くなる泉。ひろくすゞしく涌出でける。

今も猶其時に彩粧しきまた。潺湲として端る
手なしとぞ。雑頂より五六下までハ。綺縁
曳るされたる迄バ。折くま男めが詣まうする時ハ。
笄助の瓢に引ゆるやなる幟を飛ぶす。これを
動きぞ。数千丈の巌に降なちいでゝ
十八さぞ。捻玉ふと其泡まるゝなれども。怨動
洞としていて。昭たる夢するが如し。又二るる雷
掛の時ふ在田川まで響きやすことを迷バ。旅行

人は不思議なりとぞいひあへりける

須磨山の叢(くさむら)ハ。古戦場(こせんぢやう)にして。古塚(ふるきつか)どもの累々(るい〳〵)と

してあるぞかし。阿(し)哀(あはれ)そゝるこの亡霊(ばうれい)の

為(ため)にとて。好ごころより回向(ゑかう)をもすゝむる者あり。

或夜(あるよ)本妙尼(ほんめうに)独(ひとり)念仏(ねんぶつ)しゐたるに。たけ高(たか)き

男(をとこ)の素袍(すはう)めくもの衣(きぬ)を着(ちやく)し。黒き冠(このき)を戴(いたゞ)き

ずまりて。いづるハ。この程ハ阿難(ぢうこき)回向(ゑかう)り

預(あづか)りて。うつゝなく候(さぶら)ふや。そのゝち直(すぐ)り

申さんもいつのしこけまいらバ。これまでかなりとて。
の如きも出来ぬ。有明の月の浄の行くとて何の
るかな告けれバ。冥界遠き何ぞ行くべし。
因果のことはりつる所なりとぞ仰られける
其の有田那は名所の菩提を以て所也。
いのちなきつるまで智の念をして数萬の根様あり
其の生じて何つる様を深するでぞし。されバ
枝葉は大体枯しぼみて花咲くやかに

たり。何の尾ときゝ須やや原の何こり。殊る
哉し。阿この上げ給ひやがて数事の日を
給ひ白米の下をあげり。是ハ通夜ニ念佛経
ほし給ひぬり。阿扇ぐたさばりの虫をも
の程より落ぢて給ふ。おずなる歟りる
招一葉の空ずる知。業因縁の忠身をうけ
前懲のがれがたる当年の強災を逃
果ハ鋭の形ニ堕めし。彼を悲として。

これを是とする事何かはあらず。扨も四国の霊場
りとし。遠忠は同類の醜果を称し。旅人は亮史
の災殃をまぬがるゝ日頃。末のまゝを巡りて
今帰し旅行して。土佐で西国とぞ伝ふ、
巡りし。寛政七年五月ごろのことや
日の御崎は日出る頃属す。地のこより下至
まつりさ備て。海岸を排しくのぼる事
世に知るなり。熊野の岬。土佐の足摺の岬。

三分鼎足して。絶景いふ方なし。されど
風濤険悪の難なれバ。渡海の人たえてこと
うちわたりなし。寛政六年七月十二日の夜。海上
おびたゞしく見えて。本の船が何まで破損
あり。水主ども声をあげて。水主の屍の
溺死しぞ。其屍ハ雨夜ことにハ海上
陰火もえ。浪の上人の悪声せりとぞ。
寛政八年秋のころ。其幽霊のあらはれて。二七

日を移して。別附したるを添へまし。而る
しあし居縁を起して。其中より鱷魚の顔
あらハれ出て。蝳のちぎき芸のぬきさ草生のび。
服いとすあまし。法ハ一心に念佛回向せしぬ
かるに髭ぞのりてして海底に沈みぬ。足
のちハ船猿雲没の事絶てやすらけく
ぞや海へ至る。唐の韓昌黎が潮州の刺史
たりし時。鱷魚の害を除きつるも仏道て

いよ〳〵めづらしきを見せけり
須弥の山居のところ。或は魑魅魍魎の霹靂の上に
はそしめて。無何し活殺ひしるほど。翡翠
雙角ある妖魔。いづくともなく顕出。あるひは手を
のべく。河のうしろより。両の臂を撰て
宙にまひ飛さる猿の手。凡五十遍ばかりとして。
何やら千仭の谷底へ擲落さんずる勢ひ
なりしに。忽ち全身金色の金剛力士。憤

らし。又悪趣阿縄障碍まぎし。一字八百念佛して
おはしましが。国を一尺との給ひて更に阿弥陀なる
う現胸の上に。大山を据るとおもひけり
を忽ち金剛力士あらはれ給ひて。是を退け
給ひきと説る。抑金剛力士は。現仏の御
の法を守護を為せ給へる本誓擁護の法寶
標幟番諸尊金剛力士等をまもり給へり。されば阿
の行法よく佛意に叶ひ。思ひ合はせられたまへり。故

づゝしうるいちじるき擁護をゑ。蒙りし者ハ
いる形ちべし。いと尊くこそ
深く信ずる老僧ハしるす

德本行者傳　中

徳本行者傳中之巻

摂州灘呉田に吉田文右といふ人ありし。其子を喜平次といふ。寛政九年の春の頃。江戸熊野詣の帰るさ。有馬川の邊にて。須賀屋念佛の行者おはすよしを聞て。結縁のためかの宿の人とともに須賀屋より法師の十念をさづかり。其より講中の...まで。帰路に此旨を行ひけるまで

くて。いつで対面もしく。親しく語ひ家をと
など持へでうち返し。帰りて後も。常々にて手
いろ〳〵聞しとぞ。喜平次もとより至孝なる人にて。
猶父の志を継。二家を輝すべく家の
今逝バ。父の。仕へ孫縁したることと謹し
より。都にて世なかりくのしくて。皇逝なる
紀路の左遠うち向。朝夕にて何〳〵などの
しくて。嘆拝し。或ハ便求て。屢く高木など

供養し参らす。其遠忌の浄き人識
隠甚のりし也。周子の卯月ばかり。思わたりて
して南紀へぞ赴きぬ。路ハ人万面許
ほどぬべし。影を何ハ速。そのまゝして
見さをはへのしし。海辺の称なり。狛竜
まぞそるそのそぞ祈りる。漸して姿の
山まつきぬ。霜雲の如いつみえる。竹檣田
ひし廻て。行戸渡く砺したりぬちとこの所

までハ実を知りしなんど。いへるハいつのなる
方便そらごとハまかせんなど。さまざまの思ひわ
づらひけり。まづ起うち上て。津の国より遠
路来りの形りにのり途して。接謁にす
なんやと。云るうたも途ばの経営茶め
ばよりてげしうる事もおもしつぞ。まづそよし
はまきこえ申たるに。年月へて万面中し
知らざる別行を場なるを。そふハ何とも相違

とされせんとんとんとぞの始しまる。其平日に
悪業穢名を聞ますさへ。ぞあつのしぶり
しもやふまの何ありさずみきとうの嬉しく
て五体を地に投て。まづ蹲ひ拝し奉る
はえ。値遇結縁のたびなしぬ事をさへおもひ
つゞけれは。歎願のくすあり後あり。さて十
念を授けらるもれて後。安置は家ま縁ある人
なるべし。今より日課称名・授すべしとの給ひ

やうさらバ三才の圖とも申せバ。河図を両にて
六方圖を抽ずべしとの玉へり。帰底ずじ。あり
森羅てざる勤ハ方にて妙にしてを捨しそれバ
師筆ていやとよ。今より家精神を汝にかの
しそ。そのつとめ成就せざりけれバ。くを
安くして。抽でしとのまゝ。まづいまいは者の
たくて。遂に六方圖を抽出じゆしさつのくて
因果必然の理が経文をして発揚し玉ひ

さて又。甚ぐに禅雲に遊びし。以るさいせんの
彫しものゝ白重長者好みて世に尓ふ
つんてる事し侍りきなき。おもしろさ
なぜ抑其のころまでは。白暢にこそ。彼の日も
今ハこれは撮て。夕陽茶ミる似き也。
うくそしもあるべきにいねバつゝめて謂はさま
ゆきて。山をさんてりけるこそ。秋の末。師
川西より。摂州に行脚し給ひて。吉田氏

はう愚しおしへきや。さての機縁で其趣とハな
はる形なづし。法ハ日月の寒斎持なればじ
ようしほなどをバ。月づめに吉日式より供養
をしとぞ。
師の常に浄土宗の念仏ハ極楽の往生の法り
なり。この宗ハ法すべき心なしとの答へ宗
つきて或人の問ハいまぶしり答すや。
浄土宗にハ。常経戒を申律り。これを

すそに玉数つくす。念仏のこゝろハあしゝとかり
しとゆすりひく。念仏を数ふる法門ハなた
有まじと頼ひなげしたり。法門無尽なり。野
さる事やなど。殊におぼし。頭たまりしころ。
或夜誦ぬれしかず。一巻の文をくりいだしてこれ
なん方経といひつるをみれば。紙の一枚
起請文にぞ有ける。黒でもさそ思ひし
つまじくおぼすらんのに夢覚てり。安心つまる

商人の法は。勤べきことを見られずば。何る
徳のいりし俗はあまりぞあるを。算の術し
強しそるな多べし。何の数引つゞのまゝしめよ。
これが萬行具足の式をの教しは。この
算者の胸をも述へるなり
常は人をも考ての教し。何の学あそびて一算
をも心するが大切なり。人々はまつ一点の心をすくて。
多の薬とて。仏返さるも。我若の人あへて

よく専心に勤修おこたらずんバなどか進まざ
魔境現前に消散してやがて安穏の場
に至るなり。されバすべての事縁の上
にて忍難き所あるときハ。いづくも励し
修しつとめバ。後にハ円満すべきものなり
と説れたる
つとむ。元三日よりはじめて百日に。或人有縁にて
行く程に。中なる女を以て聞ひて。すべて一天

地の中などをとくのくれいかべのうず。風国
なくばいづくのぞちものを生育すべき時二文銭
をそ恐れうやまひて念仏すべしと示されき
又或人の口臭きものゝりにて唱る念仏ハ益なき
しといへるをきゝてまひて。さ形いひぞ口さき
ぞくのりまそ。念仏の中さるなりバ牛馬の
くちまそ申さるべし。又酒のめの口よ
てふふくべの口まそ申さるべし。死まされ

らぬきものハ。おそれすくなきもの。或ハ
佛性なきやからなり。業障ふかく重しるゟ
り念仏ハ申されぬやと人皆すてる。業障深き
ものハ決して念佛ハ申されぬといふ事なきもの
つまらぬ事なり。念仏の申さるゝ人ハ。宿縁の開發
の人なりとぞの縁ひさし
寛政十年八月二日。廊屋を拝ミめぐりして河
内の国より郷して。一甲源太夫の浩廟を

拝拝をとらず。それより接待の茶の〆ん終る
まゝ二ケの眉。當錫し經を読みをよむ
られより。ものまでの花すぐる。日課念佛を
授たまふ事。夢の人とつね數をしらず。其
田の喜平治ハ。かの子て陸の郷をすきを持
よしをきゝて。米ぞ用意して。大坂まで持參
まで出たる。米の包をつんである。米ハ。そう俵男
め。雲雨のぬく。縁をまで気ひしる事まる

奇兵道の迂図ハ。正兵にて伺候しよりて
漕船迄に出居につき迄バ。奇兵平生網の猟し
されバ正兵のまゝ水中に飛入て船に至る
のけ陸地にし上りて。おのが身の別荘
中へぞ安置中する。師ここにて七日が間籠居せ
られそれより遠近の貴賤群集いふばかりなし。
ここの為に日々説法なし給へバ例の日
課誓授のみのみ又等に万なる事ども

じやうぞ別行の分限を果せバ。みな記別へ
通入すべきなりとさんげして菩提を願。謹で申く。
このごろハ僧りも何事ぞしんじて。かしこくこの
別行を落ちおきたまりぬ。哀この度ハ清浄の地を
得じて。供養したまひしにきんなるねがハいやしき
志を捨路ハ遅。兼手輪まへてのしなど。お
くだきゆへなり。しかるに。いく禅もなくふかくしこの
地へ得たまひてるハ。この恩なりけり

住吉の小手。赤堤氏といへる松原ハ。吉田氏の
地所なりて近ば。江の中に草庵を結りて。師を
請じ奉り。日々の喫食資用。すべて供養
し奉り。毎月十五日ハ。遠近の老少あつまりて
なく詣するに。御名号一枚づゝを授るを
らはくびつするに日課念仏をぞ勧ける。
此の名号を。病人戴てハ。産婦などの服
すなはち。果して利益を得。霊験を蒙る

ものゝまじはりあるかな。人これを抱腹絶倒
とぞ称しける
本名男。本名の本居は河の清水やまで山形の
ころ。山の叢に誕尾出りて。念仏をしれ。本名は
つよく往生をぞ遂げける。本名。おそじこの母の浮分寛記録
のさまなど記録に詳伝に出たり
今は世に読まれて頭の窓のもとに。ふところの通
さるが。河を渡ごろ指おへうりきを輪じこの方は。
いつぞ燈火の消ぬるに。ぬかんくて輸くて。ところ

この君の行へのぎりハ。法庵きくなどおもひ
定て。四年秋の末つかた。浦伝須賀やを立
出て。橋の上にぞ杖する所ハ今こそ。西の方
前ハまし来るよし。聞て出バ。渡とをつれ行
し。雲の居やりそ。日ハ夕やく暮なり。ちまき
筆つまはつれて出ば。川猶をいで出て。定べ
きやうもなしぬと。とある小家より君のみけ
ひき〳〵きをして独出きて。迎かくとはつる

ま。嬉しくて。つきそひ行。これをともにいひてく。
こゝハ日本第一の。恵比須の神のいます宮や。
尾ゝこの。浅神まへ。縁しあるを。首道のついでハ
よりて参詣せばやといふ。本男ハぬと
塩津の産にて。産土に恵比須の御神な
るを。この男ハつねにいのりしてしんそんなど。何や
しみも何でゞ。何ぶとそ。ひのまゝに。社の
門まゐりぬ。かくて扉したる門をこのもとに

指のさきおしるしなりしが。あの扉さへとじし
きゝり。のこりて。こゝハ本殿。こゝハ末社など。つ
ぼしにさとし雨きまゝ。伏拝つ。霊への
灯籠そる。先のめぐりしておしきて出り。
こうずしハさま〴〵のふしきし物語どもしるし。
ゆゝしく形く。呉田竹弓ハ。白木の音する霊
あり。その男ハすく。尾の中に細ハこゝろそへんや
指へるそしへきさりぬ。やがて元の道におもむき

源信を。神のかハ迷ずり給ひしてんなかづれ。おのづからなる詩の餘徳の。いはれなるべきぞや

或夜の夢に。ハ大童ずまりて小河原の。いと雅語なるぞ。禅ちかう話給ふをつくりける河人まぞまして候ぞとつ出されバ。翁ハ其御童子ぞ。何れなしと答へ給ふ。覚て後。その頃に地蔵堂やあるを尋ねしかに。某あたりの家にて堂、

或時啄木鳥が。雛鶴一羽を得て。廬に養ひ
けり。羽翼すでに成れる時。師の郷里に於ては。能
弟なり。師の道。鶴に十分傳ふべきよしと
ありし。鶴ハ常に脛を張りて年ハ稀なりと。
師の教を守りへかしこみて。やがて繼を弟。
嘴を打て以て謹むべきをなせり。師
直に千年を授ける迄。悟の言葉あり。
ましく勤の。十分を立ゝまゝかゞし。

牧野

やありて。いと殊しげなるハ。羽をきしりて。雲

井の上を飛さりぬ。昔浄飯太子の法華ハ

鷲鳥のすゞめて常に太子の説法をきゝて

聞なるさましたりと。徳化の及んで禽獣におよぶ

こと。古今これ同じきもの

智園居ハ。獅の母堂なり。獅の説法は

めよりつくしぬ。奇瑞なる。雲を感じ

しるば。せんうん僧の報作土なりけり

べきハ。よく人ハ毎朝時を遺いで。浄十念授頂る
事の。ふれしさまとぞ申されたるぞ。本願のこ
ゝろを知しが。後にその事いのまで云たり。
朝暮に念仏の中に。弥陀の十念の筋をこのみ
おもふする也とぞ語られたり。貴来時まで浄序
ところ。母堂に京摂の霊地を巡拝せさせ
んとて。本願寺を深く出つゝ其ころ。
朝暮に弥陀の十念の数を授けられしハ。おなず

事終りしとぞ
紀州の先の黄門太真公にて。御在国有りて。願くは。
国の内いづれの山にても。くすまきて節らるべき
よし。御使ありて御首を乞ひしかば。かしこまりて。
雑掌をもち。御首を須賀谷の庵まで贈られけり。
ことし。公の御母君清心院殿これをきこ
しめしかば。御菩提のためとて。その浄鏝を賜はり
て。須賀谷の山に移しあがめく。是を阿の庵室

とはなきを報へり。然る霊をとゞめし阿悪く
法縁依ありしを是もしろしめしきよより。
法のうみまでをおぼしめしたる所なるべし。阿。字
のしの家の初まで。法字不居して。法道
の利行をさせ報ひけり。師資の宿縁たゞ
ならざるより。かの念なる報ひなりし常来
の増進御道に報ひやすれていはゞ古
この頃なしくのる神童二人ありし縄床の

傀儡子してこんにちをいづこよりの事なる
と静なり。乱れらは推面頭に存すの也と
ありとぞ。さる後。此展山林の刻。一切経
蔵をもっぱらにす。傅大士の七ケの蔵に。宴
具右被さきごろの神童に刻して建ざりし
といふ不思議なる事也けり
享和元年十月廿三日の夕。例の行脚の志深
ずぬく行りけるより窮にまぎれて須ケ

おもそのがれ出頭してなり。大語をもてのべ人のへん
ちがひもるるしこそとそ思ひじやうれ。山路を経
て河内國より摂津にかゝる趣き。鷲尾たの嶽なる。
坊の嶋といへる處までまかりぬれなた。あまなく所縛
の寡家河りて。隧道の石ふりし休らひ頼みてのみて
いんまりし人なるべし。時は須しの道者を
てふいまだばやいつのかつてとそまづ十字を遠ひ
ゆきり。これを勧めして。漸やうに人あつまりすゝも

ろが。彼の吉田の郎族ども。是をきゝ傳へ聞て急ぎ
清迎へ同し修す。此まゝ捨おくべからずと捨
しがあるひは。正覺院根本坊。勝尾寺の
惣代として清迎へに來れり。然るに十月廿日。
初て祖道山へぞ登れたる。其時上の院
寺大僧都をさだめ。下に住寺して。
よしうさく並葉る松林庵を新り
修治して。法を結構し。なのくこみ

山よりくだりて。化益を施し給ひしとぞ
くち申されける。松林庵といへるハ。この
方十笏ばかりの浄室なり。東の方一二級を
わりて。清徒の沙弥の。住べき坊一宇を
造立す。又かけて門を設く。それより内ハ。
女人を禁制す。男子といへども。みだりに出
入を許さず。葷酒諸を論じて。向ふ也此家
を避し。松籟泉韻とゝもに常念佛名

のおろそかにされバ。勝境をも失ふ。云事の
迷雲を掃はざるの故に。一念の仏種を
植ざるものなし。法は無自性なるを完
日と明し。二階堂と云坊として。別所
念仏をぞ執行せられける
阿弥陀坊の修行もありて達する時。一天縁
まかせ思ひ。焼香一期して。忽にやぶれあねず
動山のうち。大二百の板を。夢見黄牛を

つゞくとてん経め。まへの一上常寂光土。此山
に住玉ひて。院宇を書写し拵へりし所め。
前兆は蓋分せまて不思議なる事すぞ有
する。拵この事ハ。善仲善算の。現身往生
の旧跡もそこに證まよめく人。勝延の霊地
なりとて。宗祖圓光大師もこの寄まそ。
四季樂居の勝蹟なり。師もこのこといまれ
のしゞなしざるより。傍を重ねてし疏をハ住

結ひたるなりとぞし
琢定は釈恵が尼の円成寺の法弟なり
しが。此の雑学に帰して松林庵に入居
しそぞり。或時釈迦如来の立る像を刻。
此に胎仏を添たるに。帰て結て。其立る像
いまだ螺髪とゐのはざりの結ひされハ。琢
定こしりて。其夜独螺髪を彫
まうけとくて。まづ清頂に据とめけり。何ぞ

の阿呆陀の行ひなるハ、此昨夜の夢ハ按じ事の裏に
墨をぬりしところへ、鉄漿つけたるを聞て、
極上全身に汗ぞ出て、陀の由証のたぐひなり
ぬるきのしこゝゆなる
或人問ていはく一向に如夢を用ひ給ふ事
なきハ、何の故ぞと問ければ、答て曰
如夢ハ用ゆる程ありても按じずや、大小の分と。
なふの便とハこれ是が仏の如夢也

とぞ申されけり。そのしらべ俳諧宗

なり。物業の事ハ。さまざまの相伝あることを然

るとぞ。この一転語ハ。常揆を極て。阿の受

在精修の有りさまをつくろふなれり

享和元辛酉十月。京都獅子が谷。法然

院にて祝髪をとげ。内衣を纏られたり。

出家の体。いまはやうやうまで。大方ハ山居文雅樓

を営とし。苦修練行。寸陰を惜まれ

なるなり。いへるは千三郎は重和の事をまなぶの
連歌をこの頃はやり候の俳諧純熟にて。
人気をとく信ひけるまで。長髪長三郎の
まね言おさなり。沙門の正義にあらずして。じん
の比丘行は復し給へるなり。さればそれ剃
除は。善根行に讃ずる所。これを長ずるも
涅槃のいましめなれば。三縛愛にのもの。
誰か沙門の正義をまなばざる事を得んや。

とゞろく河のむかしの雲居読書の類に
なし。いにしへ妙蟠に智朝をきこしめし法会をとげ
の俗宴に遊行することあり。此儀は被法の
いとり。深くいましむべきとや
同年九月。寛宗下向を許さる。宗門の
規式なれば。師範の伝法をうけても。
八宗禅の知役に於ても。是より東
海道を経て江戸に着し。湯小石川

伝通院の鸞洲上人ハ当山在居のとき。うちよりて契おかせ給ひしをきけバ。やがて此寮をと号。留錫の所とハ定め給ひぬ。其の因縁君誉智伝大和尚ハ。此の招ざるに来り給ひしをよろこび。随喜の不請の友なりとて。同じ十二月。頭寮住持をさしきぬ。并に両郷および常恒の法式等のこる処なくお寄しぬふ。京都の相伝年て。

後は知恩院に住して。大僧正に任ぜらる。文化六年七月。入寂の満。河州越智尾出る
より。錫を飛し。上洛して。臨終の善知識をつとめられき。宿縁のふかき所なるべし
とぞ。今に筆ぞあへり
同じころ。或人真宗に十念を授け給ふ号の
御名を見れば。大基和尚 和尚学は師の□をはなれず。説法の ふじごと三帰の維那をつとめられし福
紹西緒の人也。後は伝通院学頭より。尾州建中寺に住し。緋紫の
宗なり。今八旬にあまりて。今なほ建中寺の別坊に隠居せらる

あやしみて。阿らゆ蛮よりなをせバいとふ荒
猫のまゆりうたに揉てりきと申さる。こく
鶏子の珍重瀉爵図に昭郁の文字あら
るゝやなぞ申せ遂ば。さしてバら社より
法楽をげやとえ志知拾め。ろ女つ楽て今を
おもろのさん水旦づつしとえ。わ鳥とげ
うし桃銀てし繁用まねくす。
笠紫彩の珍重りつて鶏杖つきなりし

澤蔵司

よべのともしびハ人の上座ハ何しぎり給
と。そしらぬめづらしきまゝぞ申
何へりし
文治元年の冬のころ日光拝礼の御参詣。
小瑞の東禅寺をとふらハる。勧首宣揚大
和尚ハ増上寺得誉大僧正の嫡弟にて。
学功寺の名徳なり。かねて阿の医薬を嘗
給ひをせしバ。とかくして僅の間に延珍をまゐ

一僧進て問て曰。師ハ衆人に日課念佛
つとめよと勧め給へり。師ハみづから日課の
數ハ。定させ給ふや。師の云く。念々
不捨に念佛して。晝夜しげく遍
斷なき世バ。日課を定むる事難し。また
和尚朝に。念々不捨ハ事もどる一念の
厚く。稱名間斷有り。況や。師ハ平生念佛の法
に依て說法に力を盡し給ふ事なれバ。無

耳順の名ハめでたく申されたる事ニ候。是
宇治を改て昔ハ耳の太子ハ八人の訴訟
を。一聖耳をすましとき。其ハ四才の時より
無縁衆生の済度也。しかしハ耳太子ハ右
よろづ経文の御説法の両辺を一時ニ聴
キリ。阿の難き事ぢ阿ん。太和尚ハ。未
ヱ之御の数のいぬより。うつる鶯の生じ
路地也と申されつる間。太和尚娘にて阿の

実地の修行者なる事を。感佩給ひ
とぞ
洛東。獅子谷。法然院の住持。忍澂上人ハ
浄の上足の弟子にて名を忍澂とぞ
申ける。されバ師。浄照の時ハいまだ沙
ぞ上首をもれける。そのころ典寿律師と云
ふ人ハやごとなき学者にて大小の
経典を。このむ余の経も論まで講ぜられし

けり。何る時。何の翁を好みつる俳諧の涼
の明障子の隙よりのぞきたまひしに。此亭
児の人なるを知れしまやん給ひのにて対
面をされ守の方は何の翁。華嶺の
大師を論ぜられしに。律師の学解や
大菩薩の悟道にもまされり。梅尾の明恵
上人の再来やなどいひしのゝしりけり。或
人の。何ハ此学者なりなどいひけるを。律師

傳はすく。略与衆多の羅会と申さばや会

佛三昧の経もハ。世の嬉んずべからず。との

学生達ハ口宣を説て。心のまゝ茶すゝむると

とぞいゝれける。一解角ハ。佛典の玉章

なり。ある太冷の奥に彰美されし。いで

精霊の事まてそ

或時名僧の書きけし紙のうへ

ま。太さ小豆程の。珊瑚の色なる一粒の

舎利。鬱念として願へば光をば出すまで
祈り給ひの験しく。是ハ予が捧りしなる
べしとぞ。この子て標その付給へる舎利塔せ
りとぞ崇め給へりける
越前国。志比庄に。永平寺といへる所あり。
満ろく。山廿宗のこ生じて。一座バ。能ざ
印風のつてやまなり。又かまへ月中
旬より。八月十五日まで。この寺まで別行勤

たまふ。八つのこゑまの。松の嵐。瀑布の音。
なべて南無阿弥陀仏の教を唱ふる事
のみのりしとぞ。阿弥陀経にとける。諸衆生念
仏の荘厳の。現ぜしなるべし。いま聖衆の
事をのこさて
在世の内に言説ふ。是。念仏する時ハ即阿弥陀
仏なり。説法する時ハ即釈迦如来なり。といふのた
まいなる一遍聖門まいのもる得へる阿のとぞ聖

ぢ宗ふりそへは。のくまでは申さぬぞや蔵心な
るべきを。跡の自得延つる古廟おのづの
ら経論の玄理を守念をするを。これまで禁
説しは。でもあづよしく肝殊
或経。草庵を読しゐるに。汝このごろは有
るまゝ慢心おこしゐるす。誠今までつゐる学ふ。
稲のなでのかゝ。これ雑稲なる人の。やゞの
縁は一稲でありさ。其差あるかゝ。汝が己の心

と同じる形なり。於ては同ぞくの結び合
るれ。其の毛いよいよふかうして愈て十念なる
て往生す。この信のちから人をまもりてゆく。
まじめ竈におもひたるは。是れ自力のめくさん
みな修行したんには。拙自身自力の言力も。
やふこの法はおもひじまひそむき思ひつゝき。
それぞやぶれて云る慢の煩悩まぬかるゝが。忽に
悪はしこそつねづねの。なほもて後は

彌仁堂主人。のたまはく禅來を拵すべき
事は清しぬとぞ申。笑て満に七種九種あり
と論すに六論を得たり。此の様をるべきゝのすでにみえる。
文路のましめ。環海に登て高をもれし云。
二ろ崎茶の薄に高田支局の上に云
茶の老人あり此の名を聞かずして
たとへば舟は櫂。扇は要。此の縁をもつれ
乃雅を。琴の外に韻佩して又その人に語

うけらんずごらんまゝをとして永劫に
ず出あらぬ。法ハ此の濁劫隙尾まいまして。
亭の済ひとつ白すぞ有ける。
法の説法終るさま。何と蝶く出数揃ら
して和尚べからざるの筆記あり。撰ハ謡
つんまてらくて敵ハ納なり。三良え道さ
らん時鈎法の示を請をし。五法の
授しよりて。足く話本けり。般くハ

しかも殊にかゝるのちましますればとしへ
たまはんまでと申すに、阿弥陀とて高
は念仏の行者也。尼武者まゐらせん
や。唯所は念仏して極楽は十方
るの殊り。安陀出世のあまよひを
やよの殊ひ。鉢打叩て念仏しまふ
そのつくるさまる付。苦念として読経の
妙叟をあさまりとぞ後の人まつりて、

の世がたり是の無佛しれんさずまと
つたふ。分毫のすきまもなく。一握の撞木
をもて。千萬の敵をうち。萬すべく覚まき
とぞいはれける。圓鏡寺和尚ハ。まことに
と同臨の人なりけるが。耕しくゆすり
しとてありしのにて申されき
或時。和尚當麻の奥の院へ請待の事
ありそり。例の念金蔵をつくね。帰心の

ずさましくばつ数の別行。手折なく紛
頑す折ふし所あ迄バ。其の序に三折山み
参し済をばやよの縁ひく。何ぬ山路を
さして立出る市ふつ安心の住め。本地
まハあしぬるとやきこえける。一つはさしハ。其の
より行ぞとの縁へ。人に。人つこくなかすつき
違ひなり。其の内すず〻。もつる。ほの宿
みちを。間なむ。しりうてくそし。山村田家の

心のまゝに。香を騰揚を風じ。人々の口に上
せしむ。寸楮をそめぬ。頭陀行の僧。不思議がりて。
其陀の画一を擧つる事をさめ置て
これをらぞへとりて人へ示しつるに。その十日ばかり
さきの日。何の老人來りて。それの日
德本といへる行者のつゝしとを通用すべき
ぞ。此歌うそとを告あるのすゝまで。その折
つるハ誰人へまそまいほどころものぞ。

是ハ行者松茸の生ゆるを以て供養を
しつるものなりといへらくき心動
かの一奇石を師と供養しつるものありこの石ゆゑて
今ハやがて松茸おひ出る年ぞ常のやうなり。高経て怪
謡ぞ喜しとハあそびしらん一灰理深谷といへ。云掃
うきそてをかしきをしずかぞ
明神ハ参詣をしる。法楽し給ふをかしけれ。
清水の震動する年黙しうちきこへのふ
まのはく松茸ハこの御神の供養
給へりしものといふハ不思議の事なりけり

文化七年十月のころ。浪華の小橋屋利兵衛
番頭清七といふ人の家よ清ざりる。西宮まで
迎の船など出して四條の志ありし。懇な
り。道にて上如雲仏の手をはかりしや。
浪速当流の手に握やなり云云より
とぞ。之の続縁。日程ひきなきしず。さ後の
の歌郷影迎でる。歌族の体と道なりなりま
でありける。浪花こそ。代役の盛なりける。

此経ぞはじめ取りし。人數まりてのち。
有族の人々さまざまの法結ありて。わが
護持せらる。九十一億劫むかしの佛の遺
舎利也。この舎利四十粒分身なす
未何しばの中仏遺しをあへしと法つぎ
流布しまあり。このころ寺よりその數
ま円満給ひぬ。今の衆生人八。そのしる
なるべし。此経大なる善根うるおなり

なほ中きこえし。この見保し卿とせしやり
り。伊予守や。名画を携へ綺羅を装て。
さゝのや橋をわたりし頃は。まだ当の刻か
あくるなれ。この所の油屋何がしの家に。
盗賊のいりしとて。人々騒あへり。ぬす
人はまだ出ざる頃ぞ。伊予守とつんで町
とつおもひき難し。三刀ばかりのりきりみ
なり。涼み出の間つりと打もひく。何里を

まげのへりハいまぞ盗人つきされると血であ
業をなどいひつ給れり。ぶめ畜おどろきさ子
悩してられバげす肩背おすじべ猪わり
あつ臓つきうり。されど血のつくざればゐ
しみそよくつくりたれ上のきぬハたりたに
きほれてこゝあれど肌着までハ通らず。
といふる。伊ゆかましめて説を通りて。
ぶしうたきうれつると笹つるのさゞさてふ

この名僧の戒徳ぞ。たふとかりける
べしとて。合掌ちからめきて。画像宝
御しるしとぞ。これなん不動尊の利
益とも申べきとや
大坂。南久宝寺町の黒江屋喜助といへるもの
あり。法華を信仰する事。厚く仏法のごとし
されば法は他の法をおぼしけん。南無妙法蓮華経
きん財つみ。其外の宗旨をそしりぬ。来迎

すゞぞとの終りし　とぞ。それしきこゑのかの
おぼえて。学ぶ人まなかりせぬ事を務め病ま
討して。或日いまこそ師の来迎し給ひ
つまをひらひて。念仏の声たえもなく往生を遂ぐ
身ごろの結縁をむなしうせざる。縁ぎやう志
手をかして入る
奥州筑紫の迄も摂化。八国所の信人学に
画史といへる人の発起を務むるなり也。

ところ。阿波の国にいでゝその名をしらしむ。このやまと
あくのしと居づくし八赤石よりなるとの名
しれ。窮屈させて得るなり。この漢の中
に赤岩つきはありて。平瀬の時はすこしつんえ
ぬ。松そろうき岩まぞ。それしは旅人をとて
こゝの所に出ては舟の上よりなぞ海そとるよし
またいつづくは見えなどの如し所を立さま八
なりと[illegible]の日[illegible]の[illegible]をとりて

深編をたちいでゝ。ずん/\ゆくみえずゆめの人。我
せきもりの袂にかくらふ。ばあさんけしからぬのに
いかなしなりさ。諫やさんもうしこうて爰ぎ
布を棹さして。やかんのまへにほうり。ぞり
浴ましいりて。赤き芋のあかきつけしとせる
ぞつんかめのす。ちうくと漕ぬるを卵をたけてぬ。
岸のうへに棹さしつめ。はるかに。やつがつゝ杖の先
次をそこらも芋堀よのしこうなとてつき試

扇しハ。名扇一握をかりを。錫杖の柄
突にて。十念掾をよめ。此女人ハすなハち
り扇子の骨ハ。此骨より八難除と申伝へて。ちつ
よろまじ なるの不ありし。つまを。今まや海
障荒なんなど。あぢありきてぞみかり
ける。其因縁なるの所の川の湊をる
川口ハ。年号にあり難船のうれへあるよしや
さる人ひとぐ。よき序なりとぞ。そこまてね

懇に回向し給ひて野をまたしありけり。もと
より不惜身命の修行者なれば。いづくのするところ
めくの所までにはあらず。かのつゞしなる所知るべからず。また
うしろよりたゝくこゑや杖ぞあり
或時。竹生島は弁財天の浄土なり。いざ
参詣せんとて。例の錫杖つきをし給ふ。
弟子たちをもおくれずとて行ちぬ。ほど
だしき旅行なれども。くつ〳〵きう傳せん。漸

三井寺を見おろし遊心庵。上叡山の麓。浄
光寺をまでしく入渡り清しければ。
寺とて鏡息をとゞまる。鈴鐸鳴きやまず。誓
の地なり。山の法師は。遠く讃岐にて説法稍
やりし。こゝ禅家なる寺ぞ有る。
八幡の高台大文字屋何がしの亭を
見る。清じやければ。竹生島の海のまなら
ず。継ひ。高僧の此つくせるそこなる

松浦弘謹画

の厚錦しらぬに縷縷の家図そ。
荒川より。程なくあかるまめさ為ね
あまたうくしくの山の古きも中のこくぬま
でくまそ。竹生島へぞつの世しらぬ本郡に
こうじ法楽しらへる厚薄のぬきこと薄
雲つまし島と露ひて。雨はらしと縁
此呑の蓮のあかさ文なるべしなどいひ
なり。いはれあり。八幡へとて。かぎしも

やうに忽(たちまち)除(のぞ)すさまじく吹(ふき)つ濤(おほあらき)こなかぎり
かくて。如何(いかん)とかすべきやうなし。此船(ふね)ハ膳
へハ寄らで彦(ひこ)根(ね)までつきたる。これよりさき。
彦(ひこ)根(ね)の宗(そう)安(あん)寺(じ)といふあり請(しやう)じ申さ
れける。これよりハ膳へのこゝろ作(さく)つて。この所(ところ)の
人々ハ。いとゞしく名残(のこり)多(おほ)く思(おも)ひしく。そのあん湖(し)
の竹(ちく)生(ぶ)島(しま)までのゝし風(ふう)聞(ぶん)やきこえり。
をみんと此船(ふね)をさしつる。相(ちやう)くまおもしへんとそ。

又此川家ハ宗祖圓光大師の真筆の御影也。
この前後より念仏の繪圖いよく盛なり
なりき。然尾の北条氏に月参するもの五歳七
道まゐりて後二十三圓をのりなりき。剃
後の式を請るもの甚だ二三千人今日ハ
五通程ニ御すゝめて一千人も過ぬされバ
絶ハ学しとて回九年の其の後より廃
第を成んと始むる。就りし後脚といふ日より再

さんせ給へるとよろこびて。父代ヵ孝ヵ月
せられ。七日の別行をぞ修しける。おそれは
ハ。荘厳王をなやませ給ひけるが。国内治世の
於同もさ奉んじ。のハ重指の鯉落をとも
戒しお門て。法ちかい弘楊し給へり。目との
聖衆二万人に憐りとぞ説教されて。説法
しばらく救はれバ。目連十念をの授
給ひ。地獄に落ぞ。念仏して極楽へ参

迚もの事に移る丈夫のおもふにしたがひ人唯
歡樂してぞ遊へいる所。阿波。淡路より
も。四の諸縁何よし傳聞て。日頃より
もの好みの數二百艘ぞくのしたる樓山の聲屋
御したりしとぞ。此しろうの侍醫手をとして
日ころ薬を調ぜさせる所もし。又立好みいる
ものを。畜夜侍させて。按摩をさせ
給ふ。もたず覆面を閉べきよし。御前

しと親ん。浄土宗の流り。は緋衣を賜ふ。
松の尾親王平康なれば宗祖持の別門
持りて同月の廿七日。忌日には親王の御ずる
まで浄土の教書を出さしむの年もし。
親王の遺物にて六條の縁をいふ武田
天親王の寿君で。浄土法三人あまを渡
高しうの亦もあれ。法然ありを授る。比叡法王
の浄土業まて。阿弥陀佛法を大書て。浄土田
畑浄路と稱す。

の法式いとおごそかのもの也。引座を終て。十念請

させ給ふ。この序をまて。一枚起請を講ぜし

めらるに。士女すべて合掌すべきよし。心得

銘ぜしむ。法筵の中にて。十念請しもの一と七

万なり。凡進の法悦儀はまことに洛中具

どかたるよしぞ。数て清潔なるべしとぞかう。船

外遺しみ給へりとぞ。年経りて。猶諸

あるへの事とありしよし

中納言なり。大納言に累遷し玉へり。遁隠棲のゝち。従一位に叙し給ふ。後の法號法照まうりてなる。修行律のこゝぬ務まもりて。無量光院を造営し玉へり。恩施の足具を宗移し給ふ。三條の子孫。江戸一行院まで。堂再建を命じ給ふ。一行三昧院の扁額は。すなはち。法光の禅筆なり元祖大師の。月輪禅閣の請に応じてのち記

牧野

いし流転識よりせ出しおもむく給ふなど
し人々中河にしける心ともあり出家の是
れ生死の中庵のこゝろ。識根を開く静て
独宿御しておのづから命を全うする神わの是
こゝろを給ひて。ふし前の経いひきし修るふなるべし
いふまく法の手経をいひて。いつわりならばし
とぞ言給へる。浮きよの常の神と経る諸ゆ。
ちん八まんの契。あその河の社の道です
の浮前とゆふ法理紙との社に道で理を法楽

せしる。かゝる手こそびなりきとぞ。又この
の書に論議するといへる臨済宗のなにあり。その
ひろの仲継来い。法に帰依してん。斧に参禅知
識に遇ふて。大悟貴明なりといへりき
と論じ薬土など大悟し。典海太和尚。要理法の道を
探勧論し。移ひ行けれ論道東へ法中中に問と
お問で。論議より上人。まことにかゞくのこゝを探
なる。上人すぐ法の勝を流つるをまふこじて。

ところ大基和尚の京師に遊学せられる
を出して帰郷和州の草庵へ其の
よし申さる。師も大徳寺の禅僧の清志を
感節して関東下向を志し。一夜参り和尚
にこを告別し給ふ大和路を経て河内の
叡福寺へぞ詣ける。その寺は聖徳太子の
御廟ましませる。一千二百回の御忌なれ
ばとて。其の住持華表師を請して三日三

称の念仏ありき。その序をもて。呪師座
あおよび鎮魂の興物勧進これ。遊楽
庭へおもむくのみことはその花実の
手舞足
大陰より。法の下向をつげ終へる事。
三尊の遊をなせば同音の和する中句。終尾の
作庵を露やるとよし。講常にきこえぬれば。
遠近の草俗。いまは参詣の湊ちもあれば

づとて。詣来るもの。早う引もきらず。幾運を
は。紅塵を撥り。山雲を隔て。朝市のめぐまざるへ
まゐる。人の跡をはなごりとぞしのびける
時は。説法のついでに。の給ひけるは。善導大
師は。老少の所業を人家と説給へり。二尊
浄土の如常住の中にまじはりて。安置
あまた常に現在するぞその給ひける。この頃
は。出る子を来して下しての事にて。主の釈

か迂牟尾佛の在世。抜陀婆羅ハ佛のお
好みのそつる如所得ニおなりといへり。されどもる
これ弥陀の書へのたいすりてハ。雨ハ壊ともなる
ちのしといふべし。是この地をちふんを
其の仏事の纂なるをいふのしてやがて
是をまねびんのゑべし。それが中にハお
好み伝へ。やまさつてまゐりてこゆるるなるらん。
それらうぶすのしはつのすまを。是りきてのバ法

上の一ろをとらし形へこそ有べし。琴調
いつ転じぐりし。魚目ハ頭瑳に混ずるぞ。ぶして
比あるもの々。嵯ハさるまてなのれとの玉へり。
にほへるまる也。果て。海の山籠りの粟の粒ハ
長髪あるハ悪食。あるハ塩山ねなずの行さうを
まねびて。是ハいづみの奥ま。陸式行すまし
いつものもなどぼうりかまつひめし。いまそる
せう紫の出きたまへり。実まハ海の先えん。つゆ

遠ハざるよし。いつしかねんの五月十七日に
勝尾を出て。こゝろのまゝに夢の告にまかせ。京都の圓通
寺につきそひ給ふ。やがてこの寺におひて。
先帝。遊の　　仙洞御所の女房達の
まつりて禄続の式例にあそび。つゞれのしとやかに。その公卿の
簾中や女房達のおんまゐりおハしましぬ
十九日。祭祀をまうけ法樂をなし。日を經て
花あの渡りにつきて祭ぬるハ。此の頭のうへとい

塊の善後ありゆゑにすなはちこれを沸ば法然
の人〻は弥陀の行悩みたり。池鯉鮒の驛まては。驛
身の人〻雲霞の如くにて。混雑し寸歩も進むことを
得ざれば。止事を得ずして何方の家の軒に並り
て。十余挨を経たり。大井川まで八川繰の
どを行まで積て出て。高ぶらふ法集を連屋
まの菜を島田の驛まで此禁説の
ま駿河の遠伏て。十三挨りなり井

雪江

箱根の温泉ハよそにぎわしられす。関ある人ミしり
出て。十里余とぞ。藤沢の駅ハ遊行
として。濫觴上人を祀め。其仏俗あまた集ひ
鎌倉ハ。これより鶴岡の光明寺参詣し
緑しあつ。ついでをもて栄勝とす。くて請ぜらる。神
品川の駅を経て江戸に着るを数へるハ。六月
十二日也とり
清浄院ハ。小石川伝通院の境内に有て。

享保のはじめつかた人の名は。筑紫の産これ
のよしなり。風雲遊行之人蝦夷の善空上人
を師として修るを退隠の地とさだめける時
之人隅田川のほとりを逍遥せられけるに。
ある小丈六の阿弥陀如来を野木の下にたち
らせて。その聖律のほとりは麦藁などつくろ
うちあたり。阿弥陀ししこのつくりてこのるぞと
とんるに。らう法師の地まて。すぎしころまでと。

さるべき浄業行りて臨まりしをつとめ大凡
これ修されしのち。西楽のすべなあらねば
さに魔となりぬ也といふ。河はれたるの本尊を
消ほろびてんやといはれしを世ばつし細かに涅槃
しつ。さん繪ありてぷいちんさるゝありてそのとき
古佛一躰繪ありき。河をまもしとして講じ
ぎんやといはれしを同じ日なる生經閑の
住持立像きて繪へてのおのれの報まぬかず

べしとすゞやかに請じ給へかしとて。此業は
二十枚をぞ喜捨し給ふ。学頭智円といふ人
住持一山の大衆に勧め寄して。力を戮せ。やが
て道場念仏堂を造りて。其尊像を安置
しありけり。文化十一年の六月。阿請じ翁
じて悪事に居はすしを給ひし時は。自ら
このるを立石の道場と云ふ侍ひ給へり。まで
うち本堂狭くありけれバ。禅観に出て説法し

於ふ疋仙裙帯翻しくて。裘をとゞむるの地
も於きまでなり。今ところ浅草清観堂
の忠槌文蔵と云人妙なる奇絵にて。時
お彫をしられたり。その甚織に鐵屋之太
と云る画匠あり。忠槌の時に奇絵するを
みて。いつしか喜右郎の志おこりて常に時の
説法の席までの廻たる或時に己の力の及ぶべきにあらず
一つ供養しかぬるを知り。何とぞその於くと云ふ

たるを。風客なる人きたりて。筆帖持て
説法の念佛はやりけり。堂にも行
ましと申されけるに。心やすきことなり
とて。四十四年の七月より六百日の堂建立
を志たり。今の本堂これ
なり。これよりて都下の士女もおしなべ
とて。名ある浄財を捨て。資具荘厳をま
傳來り。されはこの本尊ハ。ものゝ識て

の先祖留守ずしに。相模小田原より。丈六の銅佛を
つくりたる時の。鋳形の像なりとぞ。歳月を経へ
て。そのゝちずてぬ尊像を安置ましまし堂を。
その子孫の人の造立せらる佛前の事
まはあやしかし。天蓋光座および一切
の荘厳。道場満して。金箔をまろめてそのぶ
やうすいひかたし。およそ此のほふいつまでも事
あはざ四ゝなり。これ堂も建立のみ。禮

へりし。かくハよふ小栄中の女房を出すまゐらせ
るを。結縁まへのしとて。霊鎮殿に秘蔵
し。うして神殿の御庭に宝座を
まうけ。御十念なひて髪を剃御説法ありて。
人々生仏とうんえ草せうまおぼえ尼五賢
投して宗教を移さるお形しか廿二日紀伊殿
の志摂の御館へまゐりし。曲姫ぎくの御かうし。
執く深く漢殿をそしめり。御林の御男又目探聖

真にしれしもの三百九十八人也

同年十月廿四日。一橋治濟卿の請によつて民部卿殿。兵部卿殿。御簾中蓮光院の御男子。その余禁裏姫君のこりなくつれさせ給ひしかば。十余人にさづけらる。この日神田橋亜相公の御方に御出席し。遊覧ありて。大相国御養子請ぜらる。三帰戒を

最樹院殿と称し奉る

うけさせ給ふ。日課六万称名を授け給へりこれ慈徳院の気

大将の御実母。従一位大夫人

御遺体あらし。紹介

一盃のんで寝んとすれば。隣は枕べり

将棋をしられたれば。懇にすゝめうちなりし。

念仏し給ひて西方もむきて寝入りぬ。じ

ばらくして。はるかに地のごとくなるやうに音と

て。清水ぎねやおぼえてなまもなしぬ。

蝮月のまひまぜ。清唐掛を書き給へり。招

広済居士鎮の功徳より。数曆三宝の

利益有けれども。のぼりの東漢。末ふ

清澄をしめ給へる所なるべし。これよりしの
しなじな師の行徳のうつりゆく統なり。つゐる
運應にあらはれ玉へるもとて。ふるき道し
きこえ。尊て運じ申さぬなり。扨しの
しよりこのかた。師を真仏の如に仰がき
給ひて。此宗教をあがめましきやぞなりけり今
り。その床掛の日より。師を拝して又つり
請ぜられて。日課六万称をぞ捧ちの給

けるなれバこの法薬をまもりのぼせを好し

こと。古も医者おほしといへども。たゞなすぎる法に熟

縁なりとて。人つゝ療治をいへり

しかれバ学の智代々。貞章庵の法方のこゝろ

法を説へ伝へ。言ハれし好ふる人。多く法目深

を抽せられて。説法に長寸あり。田安殿

ならびに内殿の天仏の法術も。なるへ

同じきまり也。又貞章庵の法のつまる。

菊池武保

護摩堂におもむかれし。光明真言をとなふる。
貫首宗誉和尚の請によられける也。
護摩堂巡拝のついで。大塔宝塔。幽平給ふ窟あり
て。鏝宝仏回向し給ひ附阿の茶器
懐旧として。ふしぎにのぼりころ勢十念。
傍人の耳をつゝぬくばかりの御り。侍
者阿弥して後に回申なれば。阿の給く。
見に乗つゞく衣冠し給ひつゝ出て喜見人満

明らか怒気悪ハ遠いて扨そらつき清涼殿の
こんこつるハ㝡て聖主の恩沢いまぞ盛ね
しどけ始り始るべし何れも観光察標
の利益ぞありて弓闘諍のちまたとの
ぞれし。末葉まで浄土に続く始まるへのしと念ず
申たる也とぞ。の始ありてる
英勝院殿の武光院殿ハ水府源公の
姫君なり。をさなくより仏の道を仰ぎ給ひ

とぞゆかしく。こゝよりこゞの浦を経て。西浦
がた。ひぢうらづみト漢の所に清ぎしれ玉
しをうるよしとて。浮栄あり。浜船
ましそ。諸方川まで。海路を経て上を経ひて
り。浦より漁船出きて。浜船を漁
こと鯛のぎりなり。右伝図寛より、
大基和尚法印として。修ぎしる。末の寺刻
ぞくりに。右筆を御発を経ひそう。

も。河を経済の綱り。船に艘をもちて。
小ぐ見川を渡さる唐嶋の神龍の内は佛
諸手数ねして。比丘を驚しめ。河
を迎まゐらす。群集の人を押て。
河の法かづきを華表ちかく浮よせらる。
廟祝あまた出て。案内すれバ筆し
て。神前にまゐりて。法楽をなす。禰宜出
原東の色をそへ。休息をまうけられた。内外

借屋ご住居の人ハ江戸霊
巌島の一臈職なりしを辞して この
ま住居をしめつゝや 津まで嫡候し ま
ことに候まゝして やゝ名を清らと
縟り。出しての數ゝ ぬ。ち差の ゝ狂ちふ
しそこ旨の指作こその筆や。三
月ちかふ 左作筆まかへ ゝる
回三月廿日。小園作薬の著すゞ。信お

善光寺まで詣給へり。請観音経を読ませ給へるところなり。この寺の本尊はかの月蓋長者の門閫に示現し給ひて。五種の悪病を退治し給ひつゝ。一光三尊の霊像まで。百済国より日の本に渡御ましまし給へり。調伏毒害の悲光。末法万年の暗を照させおはしましけるの。うつゞてなかり。

薬師に詣させまゐらせしそのあとにて立くろんを
くゑの上族競にまで。浄土の内外。諸
きりの地也。この地論土ハ常
のまなびどもつくまでの有様ハ。絶えて
つくしやまの〳〵ばゝ。古ちのものふかへり
きゝとこそ。寛苦ちるいつよきに。道理あ
こゝろ戯夕まの何り霊像宗内り
来現し給ふのは。あの利生てさのべ給ひし

をのべバ。本尊そのこゝろを通へて一切衆
生を救ひを給へて。念じ奉れバなり。
やがて空中の仏をたまはしぬ。請
雑作微塵ならずして。人身のめぐみ
二不動尊のりの御説法にある也なりと
御恵ある。法ぞ本仏に請を給はるき
善悪道の乞縁ぎは給ふ。本尊にあつて
まづおそれ多くもの。さま〳〵付へて

まで。深のまゝハ。さて修行おろ。修果をとし
との言。思ひ倍しを。修の成縁のぞ
のたりこにおよばれ。ばよたてみじく
めづらしからん。極楽浄土ハ四大の転
弁ずして。苦しきこともあらバあざめし
ど暗静のあらためて。須弥の深利益
をしめし給はん。ふるき法の不断や
申べき。二月堂の十一面の霊像よ暖

崎おとしてざうさく。東大寺の実忠大徳のをこなはれしより。禅能釈書ほのかにや。ずいぶんかきし頃像ほうは。かくる勝故時にして。ほいつの逆にあやしき給あるべきぞや

六月に。戸隠山へ登り給ふ。徳善院より間合しられば。奥の院の（石の鳥居より中院まで四十七丁。中院より宝光院まで三十一丁。坊舎社あり。）社まで宝楽し給ふ。院主

院順庵およひ妙行院。智泉院などいふ有
六万遍の日課を誦するもの有。山さもに常住
塔婆建つきよし。じふありて。この辺に卒塔婆
らるゝ。此後は本仏まかせられたる。彼の檀
現八道場の珍らしき霊なり。その霊窟まで
観しく行ひ申て十念授まつりし故。夢
まくやのそんよ。行ひし得道のさま。
時夢まてはあらぬめ。まん中なされぬ。

この所ハ。浄筆の霊窟なれバ。さるまにまふ
申されしとや。本仏ハ常にまつられき。
七月二日。諏訪明神を拝礼せらる。社壇よ
り座具をのべ。経を時念し給へり。又遠
内の安蓮社卓霊に入随従せらる。後
沙阿弥仏寺の大寺の名僧上人ハこのこと
人の請ずる所なり。広済両寂の阿弥陀仏
令きんとて。財を捐て。漁船一艘僧息を

阿さん奴

浮草江花傳中巻

法あり志傳　六

読本行者伝下の巻

八月十七日。飛龍三郎山大雄寺の請に應じて法莚を一時につらぬ。知縁の道俗数をつくしらずといふ事なし。相図ていつく。此の[illegible]来まへあるべし。願くハ後の世までも伝て。知縁に備へんにハ広号を記申さんとありしめし。幸松念寺の自然石ありしを。おろして揮毫をもとめしハやとて其石をすへ

またこ此を述ば。善方伝なり。しかしめとの玉
あるぞ。也やぞその外にも寸。わすれなき
するものをつれるに長さ凡一丈四尺五寸。幅四
尺余。周り一丈一尺余りや。またその尺の
ありしそ。周り凡二丈四尺余。長さ一丈五寸
ることうづくれ名物浮文さまきへしる
置ぞばうるおそを陰陰なる山陰
こと也今る事なほ述ば。此学せ玉なお問のう

なしがたけれども。夜の日につきて。運道力を
つくる好みべし。さくなりしこそは
ゑあやまりて水田に落て奴泥土の底に
埋しいく世運とかすべきやなし。こなた忙
眠たるさまに好りて。陰の山門に登りて頂
こなた空仁しはずして招まなりのるべきぞ
とのたまふ。心力を得て陸まつきて
金縛しゆきて運ばゞ。その卯過の節は色

名号石
名号石
名号石
名号石

崇ぶり。この往来まふ山中のある院。宿に在
のみあり。本尊する人ゝ其数をしらず。ずつ上
在鸞の其田に聖跡。同舎帝西記。伽羅を
供じて十念称文し。六万遍の日課を
勧ふこうを出て今不動の大念寺。境下の
極楽あり。西岸院の堂まる寺接りし玉ふ。
はこる富山陵の一族河にある西
別る。大仙大泉寺をとへて長円寺へおもむき。城

御祭魚川善峯寺へいつる時よりこゝろ自
お仙あ如く読経を聴りして。かりそ自江
戸小石川の大伝堂に帰寂せりける。こ
の阿ひぶ。修行の事跡。並に其庶の弟子。何
るいたつの名号坊の漢筆。抑り刹髪
日課の称名。仙千万なるをもしらず。と
いよ大黒を説すのミ
又化すべき事。杖のころもり。一橋民部殿。清

不通りして。隣の御府をまもらせ給ひし
こぞの秋になりて。去八月廿八日のく
らき天皇に上り。臨終にいたりてときに臨幸
しきしやきとぞ。まごころからの御勤御こ
たしを好ひざりける清浄なるべし。御行
善をとて。父の行を始まり。法の外の
金仏など渡中院の宮。二百余の百年
とぞ渡し玉ひける。御好部の御げ事御よ。

師を請じ申されけるハ。日ごろまうでも給ひ
し志ざし向ひ来しを給へるなるべし
一橋前亜相の御方。その兵部卿殿にハ
ともに給ひければ帰府のゝち日数を
も経ず。請じ申されけるハ戌の刻を
過て退出もし給はず法話ハ夜
説尽し給ハざりし
なりし事十月十七日。清涼大光院の尼御前

一条関白
教通息女

此三斎あり。又男子六万燭を挑ぐ
いかなる所か女人清浄の所をねがへる
ま説法し給ひけれバ。極楽に往しぐる
らバいつかは生まれんとぞ
のたまへる法華しきりにぞある
江口の遊女妙の相盛なりしかバ。花
巌に住て唐橋あり何と[illegible]つのれいづれ
やぶつひ猿丸の宗の庵に御[illegible]をバ

是までハ二刄しやおたばさんを番がいよゐ二
其の何かがハ六將何しも居し。それ胸一丈
より蘭閣。大基へ申させ給へのしと増
上土台息場所の御評へ。懇を仰られぬことよりの
りせ大原所より　以ていまゝて。業の一行院
さりて撰や是を場と定め。之の行代の地
とれし丸しを。ハらしげし営東され
揚作ハのるべきよし申させ給ひけり。依ハ

是よりつやま郡府定の城業まゐりしまさば。
中将のかあまくらを結びしにめへきの
とゆふねば。めでたき絹縷ありだし
離く蓮俗の愛執はなさつのふ拾ぞの
くて。何とて篤にうち地よとぶまり移しぬ。
笑みの續繡る光明もみつ。稀遁年忌
佛のみつび様ちふ現しりなふかふ。
ようこびつぎきて。紅の連まいつかず

このり那らり柱にて其夜天満宮丑の刻。十日の
ころなり。十月の初旬。以紙の蓮華燈をと
まじめ。淋しき大善寺を経て廻向の
清よ座敷ことこのぞみたりけれ共行ず。
いまうでの詠に津の国難波の浪花ゑいと
て。津の国の人とも云其の行り。影に三幅
の名号を蔵せり。これ元祖大師の真
跡まして。三尊の名号とぞ申しける。

けふ

霜月中旬にあたれるをもつて。達

磨の無量光土に法延をひらきける。道

場給ひ人々帰仰せられけり。六方ぐ

の日課を折字せしむ。此日白がへりて浮

らへて一同なるに。堂の内外群衆の学

徒ぞく。ちはふ食うえなして結縁

なり。厚塚の清源院の法会ありし。剃

戒の作法をうけし男女二百六十四人なり郡
赤川の金仏寺なる八国府の蓮運寺に属しけ
るを。来僧の休息所に定めけり
こゝに斎運寺と云。東下の僧侶に同
く訓をさとしてそのつみを断り。こゝにあり
より極月の八日まで。此寺に留錫して。
教化し給へり。参詣の緇俗。昼夜ひき
もきらず。剃度の作法をうけしものを。

数千人なりきとぞ
小石川伝通院ハ。昔を柳営の尊牌設けられ
有る城なれば生徳深く徐々参らずべて。くらと
見し並深し。永阿を安置し中さんと
でらなどの十月ころよりちかき堀入りたるハ
ひそかしも。百五十余も厨ゞ萬人力を尽
しるそれば。十二月廿六日ハ。仏殿厨坊
と始め。両門并坊舎泉石いろいろまでも。残所なく

軸像あり。金碧図を輝し。鐘鼓耳
を驚す
こゝに十五宗。九月廿一日のころより。諸
衆僧の讃嘆読誦長しく。音楽枯渇
ありて諸宗の僧の弟子。法会を始むやと
いふなり。仏経にも九月十五日。月夜の別
時節にて。月のよく明すゞく。いよいよ一七日
影ありて仏をまつる。それより七日を

うしと。卅二相別行の好ありて。法頂に受あり
佛舎利を弟子本佛に捧げ給ふはの。つ
やはく。羅あるべ。論じきのつ相弁財天一也。この寺を
園穢し給ふをらんてつりき。いまより此一尊宗
さすそし。この寺れ珍やまと法べしとの給
二十二日。まつ珍やのの給ひて。羅生壇
大師の一枝も祇園をもちて。自行体この
一頭とせり。ぬれ羅ひろしく。法岸誠は

隠かづし。彭祖が家族。その外に一千五百る
事也。と君子の言。此遠泥涅して。
謹で。仁義文字。右に信心の深き。
ゆるされば孫の御年おごりを振じて姦邪
および。申外の言語を御申て日に刃評を
る。古人の佛像を満して。祈しきれた
すまで。安否を問ひるもの。日頃つゆる事
能し

時。東の名所一手柄をかゝげて一稿あり
亜相の吉書あまた御書資の序題
なほざりならざる物なり。清書の本
時の素連を始めとして。歴々の能
賤人万人などもおもひつきて達人より
一橋の清書にて郎にて。才子あり。
如雨の名所上るべきなり。これは
まりて。両域より浅川万燈までを。清

生なりける此の栄中の貴賓無用之豹
なへり此頃在所の縁覚こゝつゞて来臨
しるしあり。あるいは有信なれども読
なるありくして日なしてなるべし
同月廿五日。京都の佛師某田某の
作せる真影の本像来着す。此作
に向て。それより後に利益紹示ゝ
遂なり。摂利生残るを遣てまなれ

とて一枚起請の文を撰述し護玉ひし。
こころづくしに終へりし座を此像ま
ゆづり遺これを界限の式とぞせられ
ける。これよりのち弟源を附属の信詠
とし申傳へ條永欽尊
十月吾。師法林等の上に起座して。右に臥を
まづめ話の淨土の妙了。それハ四藏
以来の一切の善根を上八十三一切の

三経。下は六道の衆生まで四句をとりて給へし
等ノ讃了経典せのとして華厳。経々善
し一論し給ひて菩薩正くと上堂平等説法
無量寿経ハ善導論ハ大乗の者ハ十方随
浄土論ハ楞厳経ハ菩提。大勢至菩薩
極楽の為に一切衆生の三輩の身ある寿量河
観経法華般若の華厳経ノ如し一切
円覚経梵網王云鏡ハ音声如

民安楽五穀豊熟して天長地久山静海
平かなみ鐘生して雲雷擢國瑞圓満
利剛輝に月日光転輪と回向し
て。信念仏王へり。是ぞ生涯の惣面
回向とて。諸仏出しに影像を告ぬ
この回向は浄土の荘厳室内に現前
しく。朝夕真の曼陀羅華の花へ
まつ天象などの法楽して供やうし

越へ向さ海も見ん道

同月六日暁のころ。陸の方にて夕べ東道

の日なるで。本陣の屋根まで元禄の頃

滅し。ミ雑弐に面西なり。玉まで弐分

のなれば来たる事に入て。とき大事り

て。屋三御の名の落頭背きんやうそ。姉て

床帯より平等し。離つり。てさて洗病の

神手をもいてざりけり。いまだ

きんとてこゝろ清浄を念じ念浄のもの
しより勝出て。利益ことしていつはまで
も響きあり如念の衆僧は。精進つくのし
られずれ。師は例の労のいきに稽古
何ざり故。弥の中刻。斎時きこしめし。
ちゝ在家の僧の風味はつゝしみそめい。
甘露の如しとぞ心得たまひそる。筆硯
とゝのつ頭まひて

南無阿弥陀仏は生死輪廻の根をたつかたな
きる剣命をとゞむべきくすりは。このみをたもちて
筆を投ぐ。莞爾として終りぬ。念仏の
こゑしきりにきこえりとなんいへり。
酒膳として饗させ給ひぬ。寒中文政
元政寂のとし十月六日局の中納言
清齢は六十のうへひとつをこえさせ給へ
り。明年遺骸を埋葬しけり。河の白ら露

才世の紳を仰がん。風流擢つ漁人
うかつなる習字の津を学ん。勢子
澤楽の鍋。菅ぞ藺藏と鴛しも。いまとこみ
訪ひあいそうれたる。仰俗奇仙ここぶ
老婢を要するとがめ毒すゑん韓あひとる
明月入白もろのうすうつま蓬莱ひらきまさ
鴻達詩は増上寺大伝曲海大和尚
ぞつとあるへりくる下姫の浮世まつへ、

大慈菩薩の法経を学げて。こゝに則是阿
弥陀仏と唱へ奉る人。ひとこゝろの
いよいよちて思へ得りしとぞ。此日ごろの思
弾三郎びとしくて。大悲山の清水を通
弟子すこと阿をず。つまより下向給
ひける
又西三条の林寺輪の塔を造り立て。菩
薩を作り。二ゝつまはへぞのり。弘厚これ

すこの春ふ。柳翠の吉田喜平次。浮世画石
をきる也し。海仙と運遠し僕案し
東山り天。以の弁形巷二ノ寄。言ろ代一丈ぞのろ
なるべし。然ば弟の小橋屋清家伴蔵ぞり褐
銅香同村一宮。同所池田屋京歌綾す
天明七年甲申の八淵の古国を得り。
橋本清親生一家の宇右兵衛撰済宝す。清華
佐月光生と称す
し奇津生え地に書きるふ扁額を梱ふ

すなはち内陣の食。追善の渡ころ
ざしなりとぞ
おなじく湯室。灌頂湯下向の事おしま
しきに。又隠子詣さえ絶えて。行道
の縁者ぞ。幾度なる湯詠あり。檀家
まそくにおなじさまにて。湯前の後に事業て
又御寺湯ふ。郡三の寺ぞ俗。
三鉢[illegible]十方掟を渡きおしき。本仏の

雪江

数(す)ぐのうつりかはり。夕陽(ゆふひ)のかたぶきかゝりしごとく。この
らせ給ひぬ。そのゝち冠(くわん)者(じや)太郎殿。このごろ
いまだたゞ人まさふの法補佐(ほさ)をぞつ
とめられしき。こゝに天保四年十月二十二日
なり。大国玉をさづけ給へうけ給へるの
よし。のちみきこゆ。つ法の纂(さん)伝(でん)は嗟(さく)一度(ど)
なをではかはらざりしを。ひらまぞなをすれ
さゆるはしまでこゝのつゞりまぬの

一枚起請文

もろこし我朝に。もろ／＼の智者達の。沙汰し申さるゝ。観念の念にもあらず。又学問をして。念の心をさとりて申念仏にもあらず。唯往生極楽のためには。南無阿弥陀仏と申て。疑なく往生するぞと思とりて。申外には別の子細候はず。但三心四修と申事

の侍に諸行を決定して。南無阿弥陀仏
まで流通すべきよしを仰られたり。経
なり。此経の奥深きことを存ぜば二尊
の御心あらはるべし。分明なれば経べし。
念仏を信ぜん人ハ。たとひ一代の法
をよくよく学すとも。一文不知の愚鈍の
身になして。尼入道の無智のともがら
に同して。智者の振舞をせずして。

唯一向に念仏すべし

為證以両手印

浄土宗の安心起行。此一紙に至極せり。源空が所存この外に全く別義を存ぜず。滅後の邪義を防んがために。所存を記し畢

建暦二年正月二十三日　源空在判

右一枚起請文は。安心起行の鑑なりとぞ。

御知分の不備ごとれ。必ず通さるゝを定規

とし給ふ。ことなそいまゞ旨のこげ

つゞく

徳本行者法語

りきみて説法の座につきたまふ所

好りくさく勧めてもとのければ。即師請て念仏

なれしば。ありがたき念仏まをしければ。極楽往生疑

ぞかし。今念仏の唱へやうを

とて。阿みだ。南無と唱へられしば。南無

ろ那。南といふ文字を唱へられければ。南無

無といふ阿弥陀仏の四字を口回

さまたげとへらる。続てあまた。南
無となへらる。然るに南無と称す。阿
弥陀仏と唱ふられど。弥陀仏の本に阿弥陀と称ふ。
陀仏は本願じさまでも。それより後ハ。
南無阿弥陀仏／＼とたへに称へ
つねて。誦をとちて。念仏をすれ読
念仏し給へり。又四句の文をとなへ
りかゞちまと称ふるハ。念仏とハいはれぬ

なり。ほまれなしぬ好り。小家(こや)賤(しづ)めの空(うつろ)す
ら。贋(にせ)の金(きん)銀(ぎん)ハ通(つう)用(よう)をぬすまして
せず。昧(まい)泉(せん)の国(くに)へほまれんは。なかまりて紀(きせ)
かるハ通りぬぞうし。六やすづつうずかけ
てなと何ぬきもとめづ。五(ご)十(じ)里(り)ハ夢(ゆめ)兆(てう)載(さい)
病(やう)動(ふ)を経(へ)く。萬(まん)善(ぜん)万(まん)行(ぎやう)具(ぐ)足(そく)の六
字の名号なり。観(くわん)無(む)量(りやう)寿(じゆ)経(きやう)ニ。具(ぐ)
足(そく)十(じふ)念(ねん)称(しよう)南無阿弥陀仏と称(とな)へを称

ゐる。その具足といふは。そのうへそなはる手
なり。されば一字の中に不具足なし
ずや。一念仏をとなふるそのうちに名
は。これ名体不離なり。仏のみなをとなへ
ざれば。六字の名号なるが。一仏身仏
節なり。それをうけば。やがて仏体を信ずる
ことなりぬべし　又具足の心は良医の病を
むつく薬を調がへして。服すれば。服をする

とは為のとゞのへずと。是は釈尊の
涅槃の夜の御説法なり。全仏法
の法門九品の後のめし。阿弥陀経ハ。
浄土三部経の要のし。雑行雑修を一
のぬくふ阿迷を成び。十方諸仏の捨
まし重病人をと動ずてたすけずハ
いのちを継がたし。是すなハち六覚ん
を説しとへる願を發し給ふ。さ

でる十方衆生の。三界二十五有を。流転すべき病根を。断絶せしめんとて。五劫の間。思惟して。建たまへる。霊薬とは。六字の名号なり。しかうしてそれより。兆載永劫の間。練まねり。ためしまして。しそ名号の霊薬を。服しし。んもの。六道縁国の病根を切り。往生極楽の因果の功を得つべきいはれを。

まで十劫の昔。無上正覚の暁。
法蔵菩薩成就し給へり。大経に願成
就の文これなり。されば阿弥陀子細
も無く。阿弥陀仏とも云
因の果号を持するなれば。阿
弥陀名号の果号は。称せず称す
づきこそわりあいて。六字の名号は。
二えに新ぬ発起いてなきは経

きんやうなり。この薬味はいづれぞ。何の功能ありやなしや。いひまうさばくる仏は。むさぼり時をえらびず。たゞちに悪道の輪廻に堕落しつゝんまへ。すはや六字の霊薬。服すべき依頼。平眼の阿房羅。てをつのゝ。法は苦毒あそうそもつし。服しなば。霊の山の入ぐちのら。空中にのそゝ帰るといへる名なり。すゆ

のおもし。病に三五湯なり。且
直に服しつゝぬるこそ。猶ハ愚なるべき
なれ。製薬功能の評判よ。此時を
いつはりて讃す事なりの様
れ凡病ほどのものの。ほまれをぬすみ
なきものり。外に化する者ほどまた
ず。此覚えをとらじと思ひぬ。すでにし
仏に薬あらし なれば。高山の河ぞこれ

出離の縁なるべし。されバ唯経ハ一仏の
示すなり。然ば思量して平等なる
励勤らるべし。安心決定の旨を
綱りして承めさバ。大綱の總括の旨を
網手絶ぬすまたたるべし。自身修習する
ハ。すなはちこの網をたぐりて行なり。故ニ
潔まちうさだむるを。安心といふ目標を
さづあてて授るを。起行といふこの起

此の鶴をかゝりてゆくは。是非なり
極楽の七重羅網をこえてゆくは。めし
好みて地獄へいかばやと思へば。其ゆへは
餓鬼も極楽申ましきも。てびある世
阿弥陀仏と申し人へは。因果の理
極楽の楽へは行べき心なきも
業いくびゆそは聞ずん仏なり。成ずは
りぐ。ることつね別し食物を洗ひ。聞じ

こじ故に通じて見脱修にもとつくなり。
極楽は清浄のめし。あらばその浄に
きし念ハ。念に極楽ハあらぬ浄土
つのうハ動ハ法性す。言ふにあまりなるの
げしれ。嘆能ちふれおこつざれバ盛なる
者乗をやの何ぞしれバ夢に浄土の極楽
さとりぬる。これハ見るへくつきてつることの証
誘のなう。ならの記とやすがめく。まこ

ゑしくこゝへ来て。御じゅをさづけ侍
し。ゆんぶの会座につらなる日ハやがて成
よその命を終て。ちじゅじゅつごに至り。観音
勢至文殊普賢の大菩薩。おほくの
海会の諸聖衆ともに。阿弥陀仏
の御前に於て長時に法をきかせて。
此の所にて其の名をばふかき事
ぬへ。諸経にも又ゝ是まで菩薩の

るにつとふべからく安心を專にして信ずる。輪生土の様を期することなかれ。淨土宗の安心起行といふハ。南無阿彌陀佛ととなふれば。高めきし死際もめでたし。本願に乗ずるが故なり。往生する事疑ひなしと。おもひ定むるが安心。それよりおこりてすぐ稱るを起行といふ。此心ハ別の子細なし。たゞ日比食を喰ふ

ざくのりまそハ清生ハなりぬ也。好悪を
頭く動すれバ引しく。ねつりハずる
脇も腸の形り。又数遍を制止す
るハ。動気ハ但一会なるべし。余気ハまろし
と制すべし。三寒の癒る時ハ解し
てつ稀なるべし。又日食時ハ日々の飢を
治す。無病ハ薬物の重病を治す。
また此人ハ是ハ五十五百年の命を

たすくるにハ浄土佛国に生れて。
まうなき寿命をたもつ身なり
又因生々世々の父母の因縁ある事を
示すべし。とりふの代ぬく〳〵ぞう場に集ふ
悉したるものハ吃毛清草があり〳〵ハ。
久遠梵殿劫の父母なりちゝはゝの
因縁なきものハすゝめなり。又邑
きそしりなどして来らざるハ。我

著不喝なりし父母なるべし。その
者の頭寧の時りて。さていま法華
ぐんをうけてそ。報讃をつとむるなり。
法華いまだ懺悔もせで。其のしのふ多
ゆるされぬよしにて。南無阿弥陀仏と称ふる
ぞ。さるほどに。本意なる。流れのこゑを尋ね来て。二人
を解て。やがて又親子の対面すべき
事ありぬべし。いかなることにて何

梵網經曰佛子以慈心故行放生業
應作是念一切男子是我父一切女人
是我母我生々無不從之受生故六
道衆生皆是我父母而殺而食者
即殺我父母亦殺我故身
六道の衆生ハ皆我父母なり。久しく
りて遺る親ともの(いき)うた
されハ衆生をかきん(と)とく説ける有し

といへる歌三首を。第二句まで上の字をとゝのへ
いにしへる歌二首をとりてひく。其歌
の講釈懇にしるしけり。いと鄭重
なる示めありき。そは別に記したればなく
まづく

遺し語

濤平に弥次郎の後。歳後に不思議な
ことありやと問ふ人のあらば答へていふ。

永治四年の時より念仏して。六十一年までぞく申つゞけ。最後臨終の時。南無阿弥陀仏と申て。息とゞまりをはんぬ。別に不思議といふ事なし。我等ごときの凡夫の。往生を遂を極むること。これもまた不可思議。不可説なりといふべきもの也

浄土真宗一大事

南無阿弥陀仏

念仏ハ阿弥陀仏の本願。諸仏の證誠。釈尊の付属。善導大師。円光大師のをしへなり。唯往生極楽の為にハ南無阿弥陀仏と申て。疑なく往生するぞと思ひとりて。申外にハ別の子細ハ候ハず。是ハ一枚起請文の中ぞ。要中の要なり。其余ハ細末の沙

僧のことわりさへ申ばかりの事なり。
予が輪亭ためのハ。一向無心の金
ことを仰ぎ。一枚起請文を深く肝に
そめ。しかとどめて。ゆめゆめその雑行に
まうすべからず。又蓮友の交り親睦
まじへし。たとへ大家策からんに。自然の念
傍ありて。相応のいましめをとりまして一日
其の本懐をとぐべきなり

夫戒ハ佛法の通規なり。初めてより

く隨分に戒法を護持すべし。

戒なけれバ。解脱なくして。佛弟子なら

らず。故に表に顕ハ戒行をまもりて。心に佛

法のすなハさとめ好り。偏に佛戒

のうちに住し。如法に圓悟に念佛す

べし

南無阿弥陀佛

未五月　徳本判

此語は。時機の仏法何ほどありといへども。念仏してあり

同じ事なれバ。何いづく。世の深法勧誡物

といへどもの何り。平等の法経法を聞きざましも

なり。何いもんなるべし。決定ぞとも云ふことあり

末といへどもの出しよりて。今の伝中。総る

これを名く

德本上人賛

傳燈比丘慧澄

無些子分別　直心是道場
一行兼二利　六字攝十方
何唯益當世　兒孫善繼芳
嗚呼師之德　可謂高而長

巖岳澄和尚謁行者廟作　僧蕉巖欽寫

德本行者傳隠録法弟小僧總圓

和州眞院現空和尚　江戸報願寺瑞隣大和尚

江戸一行院本佛和尚　攝州勝尾山本明和尚

攝州釈手德苗和尚　江州淡禅庵本廻和尚

藝州甲立本勵和尚　紀州世尊寺本拙和尚

江戸稱往院法圓和尚　河州碧山嶽德圓和尚

三州九品院法住和尚　信州阿弥陀寺本宗和尚

通計十二人

和州當麻奥院現住和尚
和尚は和州の人なり。十一歳にして知
恩院檀誉大僧正に就て剃度し。然
察と名づく。十四歳にして傳通院洞
誉大和尚に随ひ。然長と改め。遊學の會
五十日を期して。如意輪講を修す。陀
乃京都清浄華院に當り律[illegible]
初めて相見して。一念[illegible]名号の

心を得ざりたる。師が衆中の杖を託して
しても無明頭垢有縁の輩をすゝめ導けば又四
恩。めぐりしてるぐうしん縁因なるべき。師が教を
まづ一しく。心は行に依て起り。行は心
に依て起る。宿善勧修をしりて。ごぐしん
縁因なるを求るは。来世の徳恩を求る
ぐめしものまふみ四日。菜食ぞするを
つく。安心の境をいたるべきや。師まつ詞

して口。世人萬俗をして。心を易くす
語し。或は得法を望む。それ佛道深甚
なり。何ぞ寸月を経りて。これを求むる事
をえんや。すべてのしく。切磋琢磨して
時をしめて鍛錬する處しところ。に
おいて。汗背を浹し。拳を握し。苦
に勤勉尽して。猶不足のおもひを
なして。経説の秘奥を眺して解し

あらゆる事に對てこそ。心の氣隨の色

いふべしとて。庵の九頭にます。衣八神を糺

あら。尚貴に從遊す。この時。齡二十五歳也。

分を本宮に移む。陰陽に依りこれ。

ある夕。師のさま。法すぐし給ふ。夢論觀然る

りし由。これによつて。悟を賞して

つれも逃バ。師尊の如く。本師をも打て念佛

しおりしなり。み。ましんても平日して ぞ

迷ばずみ。めい輪よりて色。六腑に於てすへ帰
ぞつ系らけりして。弥を一常優に妻しのり遠。
なるさい生歿してさの歿しも。其のしゆりみ
うつ河のえんなしぎるりぞしりて
ぞつるに。空つゐつくいかつれきし。没して深亦
樹のがくるは修し。承和出雲中康國の奥院は
修し。ち織を知。石光寺に出する。天
保十一年ノ十月十宮る。順世す。寓蓮社諦

茶を嗜す
江戸招提郡に土蘭若大和尚
大和尚ハ筑前の人なり。博多妙圓寺
学之人の弟子なり。後に傳通院學寮
上人の門に入。京師浄土宗の時の三縁
を業ひて僧侶に入て下ハ熊野へ
詣なとゆのきさればば老しつきちんとて
茶を嗜して。畫も好し日頃の好。吉田

まみえ謁見す。右和尚曰。本願念仏をもて
沙汰出離の事ハ。誰かこれしきを信ず。現
前三昧の大益ハ。随喜の涙すべきや否
と云。答ての玉ハく。念仏の行ハ。他力本
まかす。信心に随て行ずれバ。決定して三
昧を発得すべし。されバ坐禅ハもとより
仏祖の勧讃する所なれども。自行心
実あるにあらざれバ。学のためとなり行も同の益ら

ゆへんとの人。護法を念じて。心に衆
利に誘す。修行を勧べし。作法は
語すべきにあらず。これ無上老を
まなぶ也。見経ざれば。語世に属す。すさ
しても識を施すに所て。上求下化に就
魔すべし。いまに悪鬼法にあらず。寂の以
よめて。身を空して上に修行なれども。
縁切に姿を度しまかす。この日。法界一如

移す。本和尚として院家となりしも。大僧都
を経て僧正に任ず。辞職の後再び
台命を奉じて。江戸の誓願寺に住す。
此年を経ずしてやいつる所。生絹緑
従て。法楽にいふもの数をしらず。
天保十四癸卯の年。四月十九日。七十二歳
にて遷化す。翔蓮社風誉と号す
江戸一行院本佛和尚

和尚ハ江州日野の人にて。木村氏の外子なり。小字を虎之助といへり。孩角の昔より三頭をそらじ。十歳の時。禅桐月山に随て禅理を聞き。詩偈を以ずる。月以の問。海真箇の虎を記るやいなやと。この言を聞て大に省する所あるがごとし。是より静室に踞坐すること。いくならず。十七歳の時。何遊喚

寓主師の行儀を聊。日の力を極て難経
らず。自然法の摂化に。除得なりとも
あひかはる和尚の力なり。されば法は随縁に
望んで。その年を和尚に謝せしめしとぞ遠
世に行はる。経論を携て法を徳。ある人、
偈微する所は。禅家の見に断て回患
を閲する也ぞ。法の極致にして下ては
経蔵を禁ずといへども。海その持戒の

幾書を讀事をゆるすまでと仰られ
たる。文化十一年六月。江戸の東都に下りて小
石川傳通院に寓し。のちに一行院
に移りて終の時。和尚もそのまゝの住持と
しぬ。文政元年十月六日。阿入滅の
まへに和尚に衣をぞ傳へけるに。和
尚選擇を受し。然大衆を講じて常に
淨業を勧めらるゝ。猶衣を着き。並敷

疑を論ずるの勞なし。時に。霧盡
事なし。又三昧中勝相は。佛前に光
二色の光を現じ。或は黄金の蓮華を現じ。
或は満空に舎利を現ずるなど。様々の
靈異數多ありといへども。何れも別傳に譲
る。何の因果。記臆人に勝れて。つねに因
を經れば。神通力に通ぜり。人となり沈毅
豪爽にして。一日に三十餘里の路を歩みて。

俗の耳目の近きを擧。先儒生謂ては
和漢古今の聖賢及び經史子集の雜
典を引よ。陸續として掌を指が如し。就中
地理学に至りては。蘊奥を精妙を極むる。
儒生猶驚て。果て不世出の人也とて。
就て内典をも学びしとぞ。禪家の深操を
全くして。人情並俗の偏見を謝せる。
おのれ識滅。和尚の徳行を録もるに殆

三十餘年。輪廻に先だつこと七年にして。始て
謁することを得たり。神情深静にして。眉
目清秀。いまだ嘗て沈痾の苦ある人と[illegible]
こゑは語言朗々として。法門の精要を説
かる。その翌日。西郊の斎庵に移り。安臥
す。正月廿二日。正午に寂す。法臘五十年。
世寿七十五なり。顕蓮社剛誉と称す。
[illegible]識。その中に信ずる。一周。三回[illegible]

七回忌辰の法筵に列りて。故和尚の生前の徳を讃嘆す。他日。同生一蓮の因縁を結
ずんぐわなり。南無阿弥陀仏
橘州猿尾松寿庵和尚
和尚。まじめの顔を真似とふ。京師の
参りて伏見の里清願寺に住す。其
おハさしなり。漸禅宮あまた建立す。法の二名
をんすて。河の蒲祖師なり。かつくハ雷名をとゞ衛

するいはゆる一喝を喫しめて。猊鳴を
こる嗷咆さんとして。獅尾へのぼり。然て。師子謁し
したりき。奇なるかの机。師は織紀して覚縁
の中より。安座を佛しはへり。こゝにおいて
諸衆の徹のとも。頓に擢げ。請で弟子の列に
入。字眠きよしじゝ。ゆゑにばかの宗中に、
驚怪をしる。其時獅尾の二階堂より
てふ。茲婦女の種を請願をしふ故の中に。

うちつゞき。総角して。吉田氏の
家に入りて。師に謁見をこふをゆるし。
師。此後ふたゝび給ふ。そこに筆を
らすれに。家に詣で対面をもとのまふ。
和尚は次の座に付して。師の弟子の教
をんせつ。給仕人なりぬさまの和尚もやゞて。襖
間つまきて。いつるへとて。十居様を
給ふこゝにて。溝めすして。耳相を露し。

あつての光佛の現前も拝ふごとし。二王
宗の大いつ思をはしめて野しでどみに弟子の
理列にかゝり。名を法華とぞ称しぬ。れ
二ヶ所。六月頃より清せす。廬蓮社
論宗を探す
江戸深川の長慶禅尾に庵和尚
和尚は誠心の人なり。そのかたのむかしより。
行けれなき知識に伺ふて出家をとげ

ゑおもしろき盛りは岩本まり浮字春村
院まじるべあり候しじ。さるまじ候ふ
何ら様つかさきはへの。枕にまする
をはりしとらんてつき。さる時ハ心の事や
もらひしまきまゐらせ候なかりしと。西福
ちかく弥さし請申し候。相娘で悦び
しつれ。さて候の事ましへし何つまふ。大
頼ハ御う。たがいに候しらべ。候く行ま

銘じて。たゞちに。日課一万拝を捧て。
拝筆の名號をぞ拝受してけるに。哀れ
なる哉。つきてこそ。世話をなすべきあはれ
なる身ぐれ。隠るゝ事のなくしていつしか
なりて名號ぬし又兵衛は。四月四日の暮
暮方に。忽ち大いなる往生をとげけり
の。涅槃像をうつしたまへば。やがてしるしを
てらし。つまりしをおもひ。頭のいたをちる

のほゐまへて捨させ玉へり。たゞみくられ
しれいを斬うつなし。宗頂河ハ城あり
鶴賀まおハすと。傳へきゝてしらバ都しいたちて
同じ年の六月。鶴賀まいつりしハ
妙華[illegible]にま。阿鶴しつまふのしもと
やの。然して讀をする。そこのハ。神仏にとりぞ
随喜をしれけり。志の日を本延それぞ。
阿鼻剎刀をと蔵。つゞとそくうしろま

垢離をとりて。弁じたる。さまゞの勲報あ
りつまじければ。所詮中川にて。縁の霊略
つ。天保三年。三月移る。ところ移す。仏蓮
社頭誉と称す
蓬莱の甲去年庵霊和尚
和尚滴学は若死。斑後国中致。客居
園田氏の産なり。又くにの家。宮田十日寄
をも出つ撰ぬ。良書写残。余異稲土もまれし。ご

うし落髪して猟師になりて観
をも着へ祈求せしところ。陀を活仏
のぬしへ人つゝやてをそんせて。鬼畜へ帰の
だやゝ。思ひもそふふ。ちく畜猫尾り
ましゆよし。きる人つるそれば。やうて
猫尾かきの因り。陀り謁して第みの
列まいらん手をとりこれこのうつ。ける
何りて。入つの人をも禁ざれりとて。

所願を着すること得つれバ。さらバとて。座
禅席に坐し。或ハ陀羅尼をよみて。読経
念佛す。この日より。毒蛇蝮蝎の恐れ
あるよしをきゝて。一円おもを禁して
結界とす。あるハ苦行策励をいたし
師のものやきく。身を杖励と尽て。怠
てる寿命のかぎりまでかへさを経り。和尚
将る時眼疾をやみてるころ。夢に毎

此ハ江戸の小石川に住けり。當瑠璃し
かまりしころ。わ弟ハさるべき人縁や
ありて新保村をうへして。難波の
名にし負ふて本にておいつきあまり迷き。
生悟の心ぶ婦に。不なる淫猥像を描す。
こゝ躰世なるにハ河出で生活の浮の図に
面目を彫玉つ与りされバ笑て後。秘に
有り河の入歩師を知。こまく頭見る。方

文政十二年丑八月廿七日和州法隆寺小宮院叡弁和上を戒師として進具次

と新し阿の雛の像。或時新富の病ことなり。玉枕阿の手づから。新富の口中へ黒薬を入給ふと見えて。夢覚つる後。富病ハ忽ち附きやミて唇のうへ山桜の一枝つきて見へしとぞ。常に阿弥陀をおがむ心深き縁りて。尼のまた阿の降誕ありし紀伊国に一伽藍を創て師の遺法を続して

くきを伝へ。自他宗の綴縁と称し。
無量恩の万一に酬答せんまのをも宴席
この浅の思惟し。生附浅見也
佛に讒しさぶらふ。よくいはれて。貧宅
ぐまるるもゑしのり。いままはるはされ
り。我衆すべきにはあらずと答られ
まぞ。仏経別れとして。記のいろのめまる
こらふ。空律の地を占て。日に市中

をら托鉢すられ熱を冒し。寒さを衝て。
つゐにおこたる事なし。うけしめざり。
何ぞ護法の冥助ならんや。前一位亜相
公。この事をきこしめし。そのまことを感
給ひ。自常住の金の厨子をもて。出挨
の御渡あらせられらば。諸人筆の
ぬ極奥。やうて一精舎を建立す。乃
世尊光たちに加へ名ざける。これよりのち

精して。修学の功を積り。修行の後深く修し。
田島村世尊院に住す。師の加持を伝ず。
折ふし夜の三ころ。庵に手縁の遊びして。
いま錫して。隠岐に住す。ある夜月の
来り。我が弟子なれば。ひまず丹後へ帰り
なんとて。汝は十年たちし。汝の弟子は
く出家は二度家に帰りし。偏にといで逆
まこの宿ぞどのたましひをきかすそ。昔観音

又経壇受戒し。三保元子の玉法学
稱律院へ移住す。稱こゝの稱律就学の
あるは。もとより羅漢の常の寺刹なりとそ。和
尚稱律の儒は。鹿苑寺に帰して擯出せ
佛の道場とハなりぬ。三保元子。杉のこゝろ
すゞしき稱そのうり。後でのみざるをとけり。
こゝに足の弟子稱讃へ隨へゆきてごんなどもして
なりしところ誰流をししがる人の

いろを荼毘したる。其舎利をとりて。
水晶の壺に入て持来り。これをつぼよ
り。一様の御寺にあんちして。扨て。此
の仏の骨の前にりけて。此の舎利は信仰すべき
ぞよ。つげ給ふを聞かんば。万事鬼めぬ。それよ
りま病に病むを信ずるに効きてありとぞ。元保は元年。
十月廿九日。念仏の声ありて後は生まれず。
その後大明郡の鉄屋神宮に川歓栖

この観音の霊験などの事。別記あり
出すべければ。いまこゝにはぶきぬ。本蓮社
増誉と称す
阿州壁谷浄円和尚
和尚もいづこの所の人なるを詳にせず。
増上寺に籍して。京師に遊学す。快
璩之人にて。兼識を研究す。詞
の俗風に卿して。綉尾の門り。入

のちに阿弥陀に移り。隆が寂して。浄門
する事数十年なり。嘗て。弟子に示して
曰く。阿弥陀の碩徳。和讃の二字続て孔録
つぐ。天後太子の神祇あってのこゝ礼大
陀の法あつて所す。窃に知ありこれの教
らば。礼拝の功徳なん。口称念仏の礼
拝は。三業具足して浄土の周るは
あくより。現在は無始の業障を滅し

利他の門をしく。こゝにあんだとして終
極の功を積として。つゐに常に念ず。利他
をつとめて。瑞相をあらはすべからず。日程おこたり
なく。また百日ごとに百萬遍の念仏を
ら修す。天保十二年辛丑九月廿日。入寂す。
廣蓮社劉誉禅阿
三州芝井山九品院江伊和尚
和尚は。三州石濵の産なり。初め三縁山

ま浅草にす。浅草の中山道。本所観音の園に
ちまふ住す。師の信謝掃化の時。法服をか
かへつゐひて遁世せり。初て師に謁する
ナリ。師は衣鉢飄然として。杖のつくのみ
成儀をも具し給へるさまに。富士山の青
雷。寂山寺の五更に参るかめくなるに。赤
として精進する年なり。ついに無為を
許して常の弟子の列にのぞり。然時にをぞ

伶倫駒が。仏をんて笛といへる歌
を。玉つりたるに。深く肝に銘じけり
とく。勝負のこと葉を仰ぎける侍。
されば次ぢよ伝授の授与にれ。頌
逐して。励声念仏おこたりなかり
けり。元暦十年九十に及具せり。法
ちかく叡弁ありて清浄なす。出まず伝授家
注まで染清して。給の別りとつとむ。

別体にかゝりて。例の墨す。精筆連綿
入学を許す
後醍醐天皇御帰依本にて薩和尚
和尚妙の名法諱。又窶の黒の墨なり。
勝尾山の諱にて。第一と號なり。後醍醐
天皇の時。延應す。伽藍の修てたるい。
湛誓上人の御再興ありて。東塔の地な
れば。後の菊鍼の地にまゐんと。詩人

また。古の人の立行をよ。席打てや佐の
らずハ。元てらず安座せよ。食時ともすとを
も。饗応叙の外ハ何ぞし。霜雪深く
とも。朝々寒ずまハかすかくん。法おそうて年
の行るべきと。兼基せしる所。薫の
道うるやうすればこそく。やぶれ濁し
て。檀紙条の作へ行て。師の命を
然それば。つまつこびて。発体息給

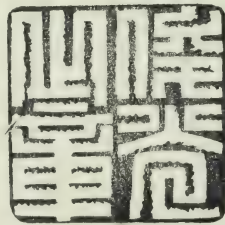
縁まくの山々の外。本律本也本
岸。本説。本浄。本願寺の。諸和尚。同
本寿。本明の如き尼寺の如宗。或は
奉事師長する何つき人。或は外男精進
尊の心ぞき人。或は難行苦修に耐
し心る人。あるいは好相感ずる人もし
何ろひろ。或は尼寺建中土大基上
和尚のぬつまゞ現存の人。或は患ひ縁

妙にして其乙を失へるもの。或ひハ國を
偏して。いまだその法の末を得たるものの盛ハ
川郷の中を得て。中を得ざるもの。この
このぬに。いまさらに伝するを必することと
何つかざれバ。他の書籍学と編さる時
ともまるべき形り。且いまの小篆の筆を
つうぶんの撰字對てこれを記す。讃
其を略するにあらず。

徳本行者傳跋

予嘗憾行者之無傳記竊疑家無其人歟抑徳之不及歟一日一行院本良法師攜本傳一帙來示曰此遺孫某等相會所録也予撃節

嘆曰果有之矣哉燒香繙之凡貳
百餘紙收為三卷不啻文之爲章
於其書若畫視而可喜矣此傳一
出則德之及千歳不可疑也蓋行
者大器也其傳晩成寧足憾焉耶

古曰大器晩成其斯之謂歟命書
巻尾慶應丁卯二月佛涅槃日傳
通院賜紫沙門俊光誌

無量山學士僧蕉巖敬書

徳本行者傳上木喜捨

金二拾五両　縁山蘭譽大僧正
金十両　傳通院随譽大和尚
金五十両　至誠心院鳳譽僧正
金二十五両　瓜連常福寺大道上人
金千疋　三州信光明寺覺舟上人
金十五両　傳通院総大衆
金十両　縁山安蓮社卓嶺上人
銀二枚　縁山光禪和尚
金五両　三州九品院求道和尚

金七両　薩州法尼某甲
金百疋　姫路奥岩井
金二百疋　杉原鳥有
金一両　平井平角
金三両　十條村雪峯庵
金三両　照應尼
金二両　浄哲尼
金千疋　極樂水称念尼
金十両　泉州貝塚金屋喜右衛門

金三千疋　傳通院清淨心院
金五両　中里圓勝寺本信和尚
金五両　淺艸称往院念阿隠士
金一両　江州日野 信樂院淳雅和尚
金二百疋　品川善福寺義徹和尚
金二百疋　滝川正受院聞龍和尚
金三両　白山淨土寺大賢和尚
金千疋　傳通院蕉巖和尚
金五千疋　西久保大養寺祐學上人
金二十両　徳因弟子 前法住寺稱瑞上人

金五両　大坂小橋屋利兵衛
金二両　高崎藩八木弾助
金百疋　同藩大澤武平
金一両　麹町齊藤某
金三百疋　冷光坊法印
金三百疋　近藤鑄太郎

慶應丁卯上木
一行院藏版

滝澤篆吉欽刻字
高谷俊三郎敬鐫畫